

令和七年度

宮崎県文化講座研究紀要

第五十二輯

宮崎県立図書館

序 文

宮崎県立図書館主催の「宮崎県文化講座」は、昭和四十九年度から「宮崎県地方史講座」として開設し、平成十九年度から地域の歴史のみならず、自然科学などの分野にも範囲を広げることにより、幅広い文化の発信と理解を目指して、「宮崎県文化講座」と改称し現在に至っております。

これまで、宮崎県の歴史・民俗をはじめとした人文社会学や自然科学・文化・芸術など、様々な分野で活躍され、県内文化に影響を与えていらつしやる方々を講師として招聘し講座を開講しており、令和七年度は梅雨が短く猛暑の夏が長引く中、日南市教育委員会生涯学習課文化財係（文化財専門担当官）長友 禎治氏「平部嶮南が遺した歴史資料」、宮崎野生動物研究会会員 岩切 康二氏「宮崎県の野生動物―ヒトと動物の関係から考える―」、宮崎県立図書館名誉館長（歌人・若山牧水研究家）伊藤 一彦氏「シン・若山牧水―牧水の新たな魅力―」の三名の講師の方々による講座を開講しました。

講座の内容は、宮崎の歴史・文化等に関する調査・研究に資するため講師の方々から文章としてまとめていただき、「宮崎県文化講座研究紀要」（第三十三輯までの名称は「宮崎県地方史研究紀要」として毎年発行しております。本年度は、講座を実施しました三名の講師の方々から原稿を掲載いたします。

今回刊行しました「宮崎県文化講座研究紀要」が、「ふるさと宮崎」の歴史や文化の研究の一助となり、県民の皆様が生涯学習に役立つことができれば、幸甚に存じます。

結びに、今回刊行の「宮崎県文化講座研究紀要」第五十二輯に御寄稿いただきました三名の講師の方々と、講座開催にあたり御協力をいただきました関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

令和八年三月

宮崎県立図書館長

田代 暢明

目次

一 長友 禎治 「平部嶠南が遺した歴史資料」 1
19

二 伊藤 一彦 「日向が生んだ歌人の若山牧水の文学と
その意義―シン・牧水のために―」 21
29

三 岩切 康二 「宮崎県の野生動物―ヒトと動物の関係から考える―」

※横書きのため、裏表紙側より開始

平部嶠南が遺した歴史資料

日南市教育委員会生涯学習課文化財係

文化財専門担当官

長友 禎治

目次

はじめに

一 平部嶠南の生涯

二 嶠南旧蔵資料の変遷

1 変遷の概要

2 旧制飢肥中学校に収められるまでの経緯

3 「嶠南先生遺稿年譜蔵書目録（謄写版目録）」について

三 嶠南旧蔵資料中の絵図資料について

四 散逸した『古典蒐報』掲載資料

平部嶠南が遺した歴史資料

長友 禎治

はじめに

平部嶠南は、幕末から明治維新の変革期に、飢肥藩重臣として藩政を担った人物であった。その業績、特に学問に取り組んだ姿勢は末永和孝氏著の『宿志の人』の中で詳しく考察されている。

嶠南は儒学者としての見識も高く、藩内外からの人望も高かった。学識に裏付けされた判断で、幕末の難局を乗り越えた。また若い頃から歴史書の編纂を志し、その著作『日向纂記』『日向地誌』『六鄰荘日誌』『嶠南日誌』は復刻・発行され、地域史研究の基礎資料として利用されている。また、嶠南の旧蔵資料等は宮崎県立図書館と日南市に寄託されている。今回は、嶠南旧蔵資料の目録である次の三点を照合して、嶠南没後の旧蔵資料の所在の変遷、およびその内容について検証を試みた。

・『古典蒐報 第三号』昭和一三年（一九三八）六月二〇日藤本書店発行（以下、本文では『蒐報』と表記する）。

・「宮崎県立図書館寄託嶠南文庫目録」昭和四四年（一九六九）寄託（以下は「県図寄託」と表記する）。

・「嶠南先生遺稿年譜蔵書目録」（以下「謄写版目録」と表記する）。平部嶠南が遺した資料を活用することで、歴史・地理・文学・文化面において研究の余地が多く残されていると考え、活用の一助になることを期待して目録類の照合を試みたものである。

今回のテーマは、私の個人的研究課題として、数年をかけて行う考えでいたが、奇しくも今回、紀要掲載の場を与えていただいた。未だ調査に取り掛かって間もない状態で、発表に耐えられる内容で

ないが、調査の途中報告という意識で投稿させていただいた。

一 平部嶠南の生涯

初めに嶠南の生涯を短く紹介する。嶠南の諱名は俊良、字名は温卿、通称名は良介と称した。戸籍登録の際に号の嶠南を戸籍名とした。蔵書印には「孤松軒蔵」と「六鄰荘蔵」を使用した。

嶠南は文化一二年（一八一五）、日向国清武中野（宮崎県宮崎市清武町）の飢肥藩士・和田家に生まれた。飢肥藩は外様大名伊東氏五万一千石余の小藩で、清武は飢肥藩北部の要所であり、清武地頭が管轄した。和田家は地頭の許で中野に在住した上級藩士であった。嶠南は文政一〇年（一八二七）中野の郷校・明教堂で安井滄洲・息軒親子に師事した。すでにこの頃から学問で身を立たいと志を抱いていたという。天保四年（一八三三）息軒の斡旋で飢肥城下・平部家の養子となると、江戸に遊学して古賀侗庵に入門した。在府中に水戸藩主に就任した徳川斉昭の「告志伝」を読み、藩政改革の意志の強さに、郷里の学友・阿萬豊藏と共に触発され、水戸を遊歴して会沢正志斎らを訪ね見識を広めた。弘化元年（一八四四）以後、総役所奉行など重職を歴任、恩師息軒の献策を藩政で実現した。その傍ら藩校・振徳堂の教授を務めると共に「日向私史」「日向纂記」などの歴史書の執筆に努めた。また記録方にも関わり、旧予章館文書（日南市所蔵）の「日向記」などには、嶠南による注釈の書き込みが数多く確認できる。

万延元年（一八六〇）学問に専念するため隠居したが、政情が混乱する中、文久三年（一八六三）側用人として登用され、番頭・中老・家老と昇進した。慶応四年（一八六八）一月、鳥羽伏見で旧幕府軍が新政府軍に大敗すると、飢肥藩は薩摩藩に、新政府への恭順の意を表した。長年にわたる両藩の対立関係を解消するため、嶠南

を薩摩藩家老・桂久武と面会させ関係改善を果した。その後嶮南は、飢肥藩大参事として藩制改革に従事した後、廃藩後は政治の表舞台から引退した。明治七年（一八七四）には宮崎県より依頼された『日向地誌』の編纂に取り組む。西南戦争（同一〇年）など困難な出来事乗り越え、同一六年に宮崎県へ提出した。さらに同一八年には校正を施した『日向纂記』を、同一二年には『日向私史』を出版。また自身の日記などを基に「六郷荘日誌」を編集するなど幕末維新期の貴重な記録を残した。

晩年の嶮南は宿願を果たすべく、地誌編纂に精力的に取り組んだが、一方では将来を嘱望された孫の平部俊彦を西南戦争で失い、自身も病に苦しんだ。平部家は外孫の満弥が継いで、同一七年頃には東京に遊学している。明治二三年（一八九〇）嶮南は死去し、旧宅（六郷荘）は同四四年（一九一一）飢肥の資産家・山本五兵衛らに買い取られ、廃仏毀釈で廃寺となっていた光照寺を再興して、旧宅はその本堂となった。

二 嶮南旧蔵資料の変遷

1 変遷の概要

嶮南の死後、旧蔵資料がどのような変遷を経て現在に至ったかを調べたところ、大正四年（一九一五）七月発行の『宮崎県史料展覧会目録』に「日向記三冊 飢肥町平部満彌」「鶴戸山玄深記 飢肥町平部光彌」「日向國舊地考 飢肥町平部満彌」と記録されているところから、この頃までは平部家が所蔵していたと考えられる。

その後、詳細は不明であるが、昭和一三年（一九三八）頃までには宮崎県立飢肥中学校（註①）に収められたと考えられ、戦後、同校は県立日南高校となり資料も引き継がれた。昭和四四（一九六九）年に大半の史料が保存環境の整っている宮崎県立図書館に寄託され

「嶮南文庫」とも称されている。その後、同五三年（一九七八）には残されていた絵図が日南市に寄託され、飢肥城歴史資料館に収蔵保管されている。

2 旧制飢肥中学校に収められるまでの経緯

旧制飢肥中学校に収められるまでの経緯について、詳細は不明であるが、「日南新聞、昭和四五年（一九七〇）一月一四日」の紙面に次のような記事が掲載されている。

「日南高校に保管している「嶮南文庫」は、元飢肥町長山之城民平（註②）氏が結成していた飢肥郷土史研究会（註③）に所属していたもので、元郡役所（註④）に保管していたものを、郡役所を廃するとき旧制飢肥中学校に移管したもの。以来、日南高校が保管しているものだが、同文書には平部嶮南の日記や古文書など多数の貴重な資料があった。これは大分県の古本屋に流れていた沢山の郷土史料を山之城氏が買いもどしたものもあり、明治以来の郷土の財産で、飢肥郷土史研究会の後を継いで活動をしている日南地方史趣味の会としては、貴重な資料ばかりなので郷土の人の手で安全確実な保存を考慮しすべきであると思われる。

同文庫の主なものうち一部は昨年秋、必要ときは返還するという条件で県立図書館に保管してあり（以下略）」

この記事は、同資料が同校に収められてから年月が経過した頃の記述であるため、慎重な検証を要する。その点を踏まえたうえで、参考のために紹介した。

前述の大正四年の目録の次に確認できる古い目録は、昭和一三年六月二〇日付で神戸市港区五宮町の藤本書店から発行された『蒐報』である。これは古書店による販売用カタログで、巻頭に「平部嶮南先生略伝（信義記）」を挙げ、嶮南旧蔵の三二四点を掲載している。内訳としては口絵の部で一三点（絵図が四点・写本が三点・稿本が

六点)。次に地図の部が四四点。稿本及写本の部が一六九点。版本の部が九八点、挙げられている(表1を参照)。

全品に記載順に番号が付けられ、資料名、大きさ、点数、販売価格、解説文などが添えられ、概要を知ることができる。

当時、他県への資料流出に懸念をいだいた人物や団体がこの『蒐報』を見て、一部が回収され、旧制飢肥中学校に収められたと考えられる。

実はその間の経緯について、令和七年(二〇二五)九月の宮崎県立図書館の企画展において紹介されていた『日向及日向人』『日向古文献の散逸(一九)』(第十五巻、第八八六号、昭和一三年七月一日)によって嶮南資料の回収経過の一旦を知ることができた。

この記事は、宮崎県のジャーナリストであり郷土史家であった若山甲蔵の著である。若山は日頃より宮崎県の歴史資料の県外流出に心を痛めており、京都・大阪・名古屋・東京等々の古書店から、毎月目録を取り寄せていた。そこに『蒐報』で嶮南旧蔵資料の流出を知った。早速、藤本書店に対して「直接宮崎県へ、御勧めに成るやうに、さうして、思ひきつて割引をして御安くして、纏めて売り込むやうにと申してやりました」と記している。その申し入れを受けて書店が宮崎県庁に交渉したのである。「幸にして(宮崎県)史蹟主事の御問合せがあり、是も「××主義」で手早い事に願って見たらとどうですと御答へしたやうな次第」と古書店と県担当者との意見の交換を行った事を記している。

この若山の助言が影響したのであるうか、何らかの対応がなされ、一部の資料が旧制飢肥中学校に収められた。おそらく当時、飢肥郷土史研究会々長で、同年一月に二度目の飢肥町長に就任する山之城民平らによる対応がなされた可能性が高いが、詳細は不詳である。

3 「嶮南先生遺稿年譜蔵書目録(謄写版目録)」について

次に表5について解説すると、表1の作表過程で、昭和四四年(一九六九)に整理された「県図寄託」目録には、それよりも古い昭和一三年(一九三八)の『蒐報』に記載が無い資料が存在することに気づき、照合するため作表したものである。

実は旧制飢肥中学校には『蒐報』から回収した嶮南旧蔵資料の外に、大正六年(一九一七)から同一〇年に飢肥町長を務めた林俊太郎から収められた武具などがある(現在は日南市に寄託)。そのため私は当初、表5の資料には林家等、他家の資料が紛れていた可能性があるのではと考えた。

ところが、昭和五〇年代に伊東祐淳氏より日南市へ寄贈されていた旧豫章館文書の整理中に、「謄写版目録」の存在を確認した。その結果、表5の資料も嶮南の旧蔵資料の一部と判断した。

この「謄写版目録」は、表題の通り絵図は含まれず、遺稿・年譜・蔵書の項目に限られている。編集者及び編集年は不明だが、内容から『蒐報』に近い頃に作成されたものと考え、この疑問を解決するため「謄写版目録」と「県図寄託」目録との照合を試みた。但し遺稿については作業が煩雑になるため今回は断念して、蔵書類のみの照合を行った。その結果五六点中、四五点と多くの資料が両方に在ることが確認できた。

以下、推測の域を出ないが、五六点の資料は、すでに大正末から昭和初年頃には旧制飢肥中学校に収められていて、その後昭和一三年頃に藤本書店から回収された資料と合流した。この時点で作られた目録が「謄写版目録」ではないかと考える。また「県図寄託」目録で確認できない少数の資料について、所在不明であるが、戦中・戦後の時を経て虫害や劣化などで失われたのであろう。

なお嶮南旧蔵資料の流失は昭和一三年『蒐報』以前にもあったことが、若山甲蔵が記述した昭和九年刊行の『日向文献史料』五六六

頁の記事で確認できる。それには「日向纂記の御自筆本は、或る事情に由り、一度古書店の有に帰していたのでありますが、今は小生の架上に来ております」と記されている。

或る事情とは、日南新聞にあるように、郡役所が廃止された時点（大正末から昭和初年）だったのであるか。これも今後の研究に待ちたい。

三 嶮南旧蔵資料中の絵図資料について

今回は『蒐報』を中心に「県図寄託」目録と日南市寄託資料目録との照合（表1）を通して嶮南旧蔵資料の所在確認および散逸資料の確認を試みた。

なお、作表する際に、『蒐報』の一部の資料番号に枝番を付したので、それを解説する。これら目録は、目録毎に通し番号が付されているが、整理上の都合等で相違がみられる。「県図寄託」目録では一点ごとに通し番号が付けられているが、『蒐報』では数冊で一揃いの場合は一括して掲載番号が付されている。同じく『蒐報』の「絵図の部」の掲載番号一九と三七でも複数の絵図を一括して同じ番号でまとめられている。そのため、「表2」と「表3」において枝番を付して、「県図寄託」目録との照合を試みた。

さらに解説を付け加えると、掲載番号一九は「日向国村々図彩色大小取交五拾貳舗」と表記され、五二点の村絵図が一括されていたことが分るのであるが、その解説文には四五点の村名が挙げられているものの、残る七村分は省略されていた。

私はこの七村は「県図寄託」地図の内、『蒐報』と照合が出来なかった絵図一二点の中に含まれていると考え、該当する資料を表4に纏めた。更に個々の表題名から考察した結果、次に挙げる「県図書寄託」目録No.一四六三・一四六九・一四八四・一四九七・一四九九・一五

〇〇・一五一四の七点が『蒐報』で表示を省略された七村に該当すると考える。

以下、紙面の都合で詳細は略すが、『蒐報』の二九で一括されている村図、及び同二一の「宇賀城・野尾城三山城跡踏査図」は記述内容や『嶮南日誌』などから、嶮南が『日向地誌』編纂の過程で地元の協力者などに作図を依頼し収集した図、或いは可能性が高い図であることが分る。その他の村図についても『日向地誌』編纂に関係するものが含まれている可能性が高く、今後の研究に期待したい。

四 散逸した『蒐報』掲載資料

前述したように、『蒐報』掲載資料の多くは今なお所在不明である。資料の散逸は惜しまれるところであるが、実は『蒐報』には、散逸した資料の解説文に、研究者に新たな示唆を示す情報が記述されている箇所がある。一例として次に、掲載番号一一の「日向油津修築伺古図」を紹介する。同資料は口絵で紹介されているため白黒写真と詳細な解説があり、従来の定説を変更する新たな情報を示してくれている。これまで、油津堀川運河は広渡川で川下した木材を安全に油津港に搬入する目的で計画されたと考えられて来た。ところが、『蒐報』の記述では、当初の目的は藩主の御座船を係留する船倉を造ることにあつた。天和三年（一六八三）飢肥藩は絵図（伺古図）を幕府に提出して工事願いを行ったところ、老中・大久保忠朝より「本件は城要害に関係なき故、伺出する迄もなし」と口頭で回答された。そのため制約を受けることなく工事規模を拡大して現在の堀川運河を開削したことが判明した。（「油津堀川運河と飢肥藩政」長友禎治著。平成二十六年年度、飢肥城歴史資料館研究紀要所収。飢肥城下町保存会発行）。

その他に、散逸した資料の中には『蒐報』が発行される以前、出版物に掲載されている例がある。それは『蒐報』掲載番号一二五・一二六・一二八の文書で、昭和四年に刊行された『日向国史』に「文化七年（一八一〇）四月書上」として掲載されている。内容は、伊能忠敬測量隊による飢肥領内の海岸線測量を前に、事前資料として測量予定地の村々の石高、家屋数、寺社などを調べ上げ、絵図と共に提出した文書の写しである。尚、絵図は旧伊東家資料で「公儀測量方回浦二付下調絵図」（日南市所蔵）と題して飢肥城歴史資料館に保管されている。何れも当時の村々の様子が記された良質な資料である。

現在、『蒐報』掲載資料の一部は前述したように宮崎県立図書館と日南市に寄託されているが、その他にただ一点、『蒐報』載No.一九の「清武二十七人顕功録」が宮崎県文献史料研究会に所蔵され、『清武町史資料編1』に活字化（翻刻）された例がある。同研究会に収蔵された経緯も不詳であるが、解題によると裏表紙に嶠南以前に旧記の収集に熱心であった松井五郎兵衛の署名があり、安永七年（一七七八）に写されたものである。今後、散逸資料の発見に期待したい。また資料を詳しく調査する過程で、「清武二十七人顕功録」の様に、嶠南がどのような経緯でどこから集めた資料か、確認する価値があると考える。

以上、不完全な報告に終わったが、嶠南の旧蔵資料には幅広い分野に亘る資料が含まれており、多方面からの視点による研究活用につながれば幸いである。

《註》

註①大正一〇年（一九二一）開校、昭和二三年（一九四八）に飢肥女学校と合併、同二五年に日南高校と改称。

註②明治八年（一八七五）飢肥生まれ。陸軍を退役後、大正一四年から昭和三年

と同一三年から同二〇年の二度、飢肥町長を務める。昭和三年（一九四八）没。
註③この会は旧藩校の振徳堂百年記念会が開催された昭和五年（一九三〇）七月に山之城民平らが中心となって発足した。同七年には山之城が同会々長に就任している。

註④明治一七年（一八八四）飢肥町に郡役所を開設、大正五年（一九一六）一月に郡営電気事業の許可を得、地域発展に寄与した。その後、郡制廃止を前に同二二年、郡事業が南那珂郡十六ヶ町村組合電気と造林組合に継承営業される。最後の郡長・日高陸は大正一五年（一九二六）六月まで務め十六ヶ町村組合長に転じた。

表1 「古典菟報」の掲載資料と県立図書館及び日南市寄託資料等との対比表

古典菟報				県図書館寄託	日南市寄託	その他
No.	資料名	数	分類	No.	No.	
1	嶠南存稿	2	A			
2	日向私史	4	A			膳7
3	諸家文書纂 写	15	A			
4	古写本 曾我物語	12	A			
5	日向記	3	A			大正4目録
6	島原城古図	1	A	1453 (絵図04)		
7	稿本 日向私史 写	3	A			膳4
8	私史稿 写	3	A	1625~1627		膳5
9	鄙稿	5	A	1410		宮大紀要
10	庚戌抄書 写	13	A	1023~1035		
11	日向油津修築伺古図	1	A			
12	大阪冬御陣	1	A		飢絵図19	
13	寛文二年飢肥之城図	1	A		飢絵図02	
14	飢肥城絵図	1	B		飢絵図04	
15	日州那賀郡飢肥之絵図	1	B			
16	南方村絵図	1	B	1455 (絵図06)		
17	東弁村之内上東絵図	1	B	1452 (絵図03)		
18	豊臣勢十万絵圍高城図	1	B		飢絵図18	
19	大友島津対陣ノ耳川古戦場図	1	B		飢絵図16	
20	日向国児湯郡鈴嶽之麓古戦場当時細見図	2	B	1517 (絵図68)	飢絵図17	
21	宇賀城 野尾城 三山城 跡踏査図	3	B		飢絵図13~15	
22	日向国古城跡図	8	B			
23	明治三年佐土原廃城後図	1	B		飢絵図12	
24	日向国鶴戸山略図	1	B			
25	谷ノ口村全図	1	B	1503 (絵図54)		
26	中村全図	1	B	1454 (絵図05)		
27	大藤村全図	1	B	1456 (絵図07)		
28	脇元村全図	1	B	1508 (絵図59)		
29	日向国村々図 (52点)	52	B	表2を参照		
30	日向国飢肥領新別府村吉村付近図	1	B			
31	那珂郡嶋ノ内村絵図	1	B	1507 (絵図58)		
32	海岸台場	1	B			
33	海岸線図 東自城ヶ崎西至煮波	1	B			
34	海ノ村々絵図	1	B	1510 (絵図)		
35	延岡海岸	1	B			
36	外浦築港図	1	B	1513 (絵図64)		
37	船越、社ヶ原、祝子村ノ内妙	3	B	表3を参照		
38	松永車田崩所之絵図	1	B	1451 (絵図02)		

古典菟報				県図書館寄託	日南市寄託	その他
No.	資料名	数	分類	No.	No.	
39	飫肥内大島之図	1	B	1492 (絵図43)		
40	日向那珂郡福島之院秋月長門守領内地図	2	B	1523 (絵図74)		
41	飫肥区内全図	1	B			
42	飫肥区内略図	1	B			
43	日向国地図	1	B	1501 (絵図52)		
44	薩州鹿児島之図 全国之部・城下之図	2	B			
45	薩摩、大隅、琉球図	1	B			
46	三県 (鹿児島・都城・美々津) 分界之図・彩色	1	B			
47	伊豆国全図	1	B			
48	伊豆国島嶼図	1	B			
49	豆州君澤郡戸田村図(二枚、折込一舗)	1	B			
50	萬實御江戸絵図	1	B	1516 (絵図67)		
51	長禄年中江戸往古図、安永七年写図	1	B			
52	京絵図	1	B	1400		膳25
53	伊勢道中一覽扇	1	B			
54	蝦夷海陸路程全図 小野寺謙誌	1	B			
55	子供必用日本地図草紙/明治六年	1	B			
56	嘉永新增大日本国郡與地全図	1	B			
57	官許・新刊與地全図	1	B			
58	文稿	1	C			
59	客游漫摺	1	C	1421		
60	義僕兼助傳	2	C			
61	漫遊稿	1	C	1413		宮大紀要
62	桑原惟親傳外	1	C			
63	鄙稿	1	C	1409		
64	文稿	1	C			
65	文稿	1	C			
66	拙稿	1	C	1415		宮大紀要
67	息軒撰、烈婦阿藤傳	1	C			
68	息軒安井先生墓銘	1	C			
69	文稿	1	C			
70	文稿	1	C			
71	続開口新詞并引	1	C			
72	嶠南文稿	1	C	1622		

73	漫遊稿	1	C	1414		
古典蒐報				県図書館寄託	日南市寄託	その他
No.	資料名	数	分類	No.	No.	
74	嶠南文稿	1	C			
75	伊勢貞丈、日向国旧地考	1	C			大正4目録
76	詩稿	1	C	1417		宮大紀要
77	文稿	1	C			
78	文稿	2	C			
79	文稿	1	C			
80	私史凡例 2枚	2	C			
81	稻津重政傳	1	C			
82	私史自序外稿	1	C			
83	満清紀事	1	C	1406		
84	日向故事竝伊藤家譜	1	C			膳6
85	息軒誌、松田志伯墓銘、蓑毛安衛墓表	1	C			
86	文稿	1	C	1420		
87	送芳野君叔赴田中序	2	C			
88	嶠南叢話	1	C			
89	息軒安井先生行述	1	C			
90	詩稿	1	C	1418		宮大紀要
91	嶠南漫筆	1	C			
92	嶠南稿	1	C			
93	鄙稿	1	C	1410		
94	雜稿	1	C			
95	客中詩文稿	1	C			
96	鄙稿	1	C	1412		宮大紀要
97	用土論	2	C			
98	息軒安井先生行述	1	C			
99	詩稿	1	C	1419		宮大紀要
100	客中詩稿	1	C	1416		宮大紀要
101	雜録	1	C	1431		
102	平部俊彦墓碑文 2枚	2	C			
103	奉賀嶠南平部先生七十文	1	C			
104	嶠南日記	16	C	1591~1607		膳8
105	嶠南雜記	3	C			
106	日向記	13	C	1572~1584		膳48
107	日向志稿	2	C			
108	日向記攷異其他抄録類	8	C			
109	本稿日向纂記	10	C	1608~1617		膳1

110	日向纂記	2	C	1434～1435		膳2
古典蒐報				県図書館寄託	日南市寄託	その他
No.	資料名	数	分類	No.	No.	
111	日向纂記	14	C	1436～1449		膳2
112	私史稿	1	C			膳3
113	日向私史	1	C	1104～1105		
114	日向国伊東御代々先祖記聞書	1	C			
115	伊東祐重公年譜	1	C			
116	藩翰譜	1	C	1623		膳27
117	元龜三年五月木崎原頸頸注文	1	C			
118	本崎原御合戦大概記	1	C			
119	清武二十七人頭功録	1	C			清武町史
120	清武に馬上口御移可被下哉と申上候口上之覚其ノ他	1	C			
121	論山記 杉田半右衛門撰	1	C			
122	日向国飢肥領清武地頭稻津掃部助謀叛之事	1	C			
123	日州那珂郡村々根元書上証文、測量方控、文化七年	1	C			
124	日州那珂郡伊東修理大夫領分書上、文化七年	1	C			
125	那珂郡戸高村、星倉村、飢肥城下本町、楠原村酒谷村書上、文化七年	1	C			日向国史
126	日向那珂郡村々書上帳、文化七年	1	C			日向国史
127	御料福島より田吉村境株立覚元文三年	1	C			
128	日向国那珂郡海辺附二ヶ村書上帳(田吉村。郡司分村)文化七年	1	C			日向国史
129	伊藤勘解由御科之次第	4	C			
130	古今山之口記録	2	C			
131	日向椎葉山根元記	1	C			
132	日向椎葉山之記	1	C			
133	鵜戸神社由緒	1	C			大正4目録
134	鵜山戸岩屋詣	1	C			
135	享保三焼失覚	1	C			
136	海防上書写、伊藤修理大夫	1	C			
137	御組頭中覚	1	C			
138	若殿様江指上候覚書	1	C			
139	道程記	1	C	1628		

140	安井衡謹・伊藤祐相公墓碑銘	1	C			
古典蒐報				県図書館寄託	日南市寄託	その他
No.	資料名	数	分類	No.	No.	
141	落合双石拝撰・河野伯行墓誌銘	1	C			
142	佐土原祐啓墓誌銘	1	C			
143	日向細島町八幡宮境内曾我公御墓所云々、安政七年	1	C			
144	贈延岡長氏文 1枚	1	C			
145	己七月十四日達シ御書付写	1	C			
146	谷口重範履歴 3枚	3	C			
147	呈温郷君書 2枚	2	C			
148	記耳川之戦 6葉	6	C			
149	浦上の邪徒七百余人魁首を召して云々 4葉	4	C			
150	山稜多年荒蕪御修補云々 文久二年 4葉	4	C			
151	鹿府応接始末	1	C			
152	唐船漂到録事	1	C			
153	飫藩振徳堂教授田中龍藏上書	1	C			
154	明治二年己巳二月伊藤鑿之助・伊藤常五郎ヨリ富高幕庁へ願の案文	1	C			
155	麥菜損益論	1	C	1404		
156	飫肥養蚕の由来	1	C			
157	養蚕略書	1	C	1403		
158	国計大略	1	C			
159	飫肥商社記録	1	C			
160	藩校時習館学規	1	C	1405		
161	新県取計心得	5	C			
162	飫肥県地誌	5	C			
163	日向地誌稿	53	C			
164	日向圖誌	10	C			
165	地理纂考 総説篇 諸県郡篇	2	C			
166	名勝志御糺方に付御取調帳	1	C			
167	宮崎県概覧表 明治7年 1枚	1	C			
168	嶋津家征琉筆記	1	C			
169	南島志	1	C			
170	菊池氏由緒	1	C			
171	熊本時習館学規	1	C			
172	伊豆志	2	C			
173	庄内平治記	6	C	1106~1111		膳50
174	吉野志	3	C			

175	中井積善・芳山紀行	1	C			
古典蒐報				県図書館寄託	日南市寄託	その他
No.	資料名	数	分類	No.	No.	
176	皇朝世系俊良撰	1	C			
177	民部省圖帳	1	C			
178	古簡雜纂	12	C	1011~1022		膳24
179	群書類従抄	13	C	1116~1128		膳22・23
180	報恩寺藏書文章抜書	1	C			
181	逸史文鈔	2	C	1349~1350		膳49
182	丙丁炯戒続録	2	C			
183	國朝古文所見集抄	1	C			
184	官中秘策、卷一、二	1	C	1112		膳19
185	嘉永二己酉年松浦重教書写本	1	C			
186	細川幽齋公道之記	2	C			
187	息軒文集	4	C	1618~1621		
188	犀漂文稿	2	C			
189	弊帚	2	C			
190	尊陰集	6	C	1328~1333		膳28
191	中井積善東征稿	1	C			
192	哀敬篇 佐藤坦稿	1	C			
193	岡白駒開口新語 4枚	4	C			
194	山陽遺稿	2	C	1043~1044		膳38
195	山陽通議	1	C	1085		膳37
196	藩翰譜序	1	C	1624		膳27
197	江関筆談	1	C			
198	夷國渡来付前後始末一件録	1	C			
199	安政五年公卿建議	1	C			
200	彦根侯殺害一件	1	C			
201	軒奸主意書	1	C			
202	水戸浪士等井伊掃部頻を殺せし時懐中したる書付	1	C			
203	万延元年三月、徒党よる或侯へ差出候書面	1	C	1432		
204	井伊侯一件始末聞書	1	C	1401		
205	彦根藩士某江戸より国元へ内報の書翰	1	C			
206	安藤公一件並江戸大阪より出状且風間書写	1	C	1430		

207	飯田藩烈婦之覚書	1	C			
古典蒐報				県図書館寄託	日南市寄託	その他
No.	資料名	数	分類	No.	No.	
208	熊本に而聞書	1	C			
209	慶應元年、防長隊上	1	C			
210	小倉藩より防長隊意外	1	C			
211	戊辰戦争聞書	1	C			
212	明治三年西征丁卯艦一件及檄文	1	C			
213	違式註違条例	1	C			
214	取締規則	1	C			
215	棋説 1枚	1	C			
216	金石学講義筆記、	1	C			
217	雑抄	1	C	1423		
218	二十七松堂集	1	C	1084		
219	隠公	1	C			
220	訂正史記写本、読史漫筆、読史 管窺、日知録、愛日精慮書志	1	C			
221	古文尚書撰異	2	C	1354~1355		
222	左傳集説	2	C			
223	古詩源 自一至五	1	C	1136		
224	戦国策補正	2	C			
225	史記訂疑。思田仲任著	1	C			
226	改正御判形。享保十三年 1枚	1	C			
227	官版 與地誌略	3	D	1256~1258		膳55
228	地名字音転用例 本居宣長	1	D			
229	日向古跡 附陵墓考 平部嶺南	1	D			
230	日向地誌 同刊行会	1	D			
231	聖蹟圖志陵墓一隈抄	3	D			
232	山陵志 蒲生秀実	1	D			
233	山陵打墨縄 大和之部 北浦定政	1	D			
234	三禮圖 南陽山人・菊池武慎	4	D			
235	貞観政要 南紀・学習館蔵版	10	D			
236	標註職原抄校本 長門・近藤芳樹	6	D	1177~1182		
237	唐官鈔 伊藤長胤	3	D			
238	弘道館叢書 皇朝史略 正統・水府蔵版	16	D			
239	国史纂論(欠本) 長門・明倫館蔵版	4	D	1146~1149		膳45
240	古史通 新井君美	4	D			
241	近古史談 初擢 大槻磐溪	4	D	1334~1337		膳13
242	訂正国史略 薄葉口入 岩垣先生	2	D			

243	逸史 懷徳堂	13	D			
古典蒐報				県図書館寄託	日南市寄託	その他
No.	資料名	数	分類	No.	No.	
244	新版改正文政武鑑 須原屋	4	D			
245	制度通 伊藤長胤	8	D			
246	度量衡考 物茂卿	2	D	1101~1102		膳12
247	茶史 豊田甚旁訳	1	D			
248	甘雨亭叢書	8	D			膳31
249	西国盛衰記	6	D	1005~1010		膳17
250	参考保元平治物語 内藤貞顕重校	15	D			
251	古今集遠鏡 本居大人・尾張東壁堂	6	D			
252	歌林拾葉集 無刊記本	6	D			
253	百人一首抄 為家卿真・蹟本模刻	1	D	1394		膳20
254	徒然草鉄槌	1	D	1129		膳21
255	絵入続狂言記	5	D			
256	名節録 淡路・岡田橋	3	D	1338~1340		膳29
257	六雄八将論 水府・青山延光	1	D	1135		膳42
258	弘道館叢書回天詩史 水府蔵版	2	D	1397~1398		膳40
259	日本外史 卷一欠本	3	D			
260	日本政記	8	D			
261	日本外史補 淡路・岡田橋	9	D			
262	帰震川文粹 村瀬誨輔	5	D	1159~1163		
263	奎堂文稿 松本衡士	3	D			
264	愛国叢談 岩代・佐治太郎	3	D	1156~1158		膳30
265	航西日記 渋沢青淵	2	D			
266	曝書亭文集 篠崎小竹序	4	D	1341~1344		
267	謫居詩存 藤田東湖	2	D			
268	栗山文集 柴彦輔	5	D			
269	息軒遺稿 安井息軒	4	D			
270	安井息軒先生 若山甲蔵	1	D			
271	江頭百詠 静軒	1	D			
272	宕陰存稿 美本 晩香盧蔵版	7	D			
273	心遠詩鈔 攝城妻鹿雍	1	D	1103		膳47
274	鵬齋先生文鈔 備前・白谷先生輯	2	D			
275	今世名家文鈔	8	D	1090~1097		膳39
276	通語 水哉館道編	3	D			
277	山中人饒舌 竹田著・小竹評	2	D			
278	習文録 録淇	2	D			
279	葬儀略 美濃守躬行	1	D			

280	入蜀記 陸放翁	2	D			
古典蒐報				県図書館寄託	日南市寄託	その他
No.	資料名	数	分類	No.	No.	
281	東坡策 江藤森大雅戸	3	D	1137~1139		
282	呉船録 一名出蜀記 松本愚山	2	D			
283	丙丁炯戒続録 塩谷世弘謹輯	2	D			
284	言志録 同晩録後録 佐藤一斉	3	D			
285	朝鮮懲毖録 柳相国/貝原篤信序	4	D			
286	臺灣鄭氏紀事 水藩・川口長孺	3	D			
287	白鹿洞書院揭示 闇齋集註・綱齋講義	1	D			
288	大平廣記	64	D	1191~1254		膳10
289	戦国策正解 横田惟孝	13	D			
290	張註列子揃 和泉守外二	4	D	1183~1186		
291	楚辞灯	4	D	1356~1359		
292	官版杜詩偶評	3	D			
293	二十七松堂文集	10	D	1378~1387		
294	三國志 寛文十年版	40	D	1259~1298		
295	左傳輯釈 安井息軒	21	D			
296	春秋外伝国語定本 尾張・泰鼎	6	D	1424~1429		
297	禮記王制地理圖説 伊豫・尾藤孝肆	1	D			
298	古文孝經定本 出羽・伊藤馨増注	1	D	1042		
299	羅山調点孝經大義	1	D	1086		
300	説約合参四書正解	29	D	1299~1327		
301	論語集解義疏	5	D			
302	論語集説 安井息軒・嚶々舎	6	D			
303	七書直解 太原劉寅	14	D			
304	官版書傳輯録纂註 成徳校訂	5	D	1036~1041		
305	尚書註疏 唐孔穎達撰	10	D			
306	官版周易本義附録纂註 5揃	5	D	1113~1115		
307	史記 鍾伯敬刪定	15	D	1360~1374		
308	史記則 崇禎四年	8	D			
309	本朝館閣賦 乾隆三十三年	16	D			
310	八代詩淘 清版 雍正六年	16	D			
311	影宋本爾雅 羽沢石経山房梓	1	D			
312	康熙字典 合本揃	13	D	992~1004		膳11.
313	字彙 鹿角山房藏版	15	D			
314	海外異傳 津藩・斉藤正謙	1	D	1399		膳44
315	征韓偉略 水府・川口長孺	5	D	1130~1134		膳46
316	官版近世西史綱紀 自一卷/至四卷	4	D	1187~1190		膳53

317	西国立志編 原名自功論・中村正直訳	2	D			
古典蒐報				県図書館寄託	日南市寄託	その他
No.	資料名	数	分類	No.	No.	
318	官版大日本西班牙条約	1	D			
319	真政大意 加藤弘之	2	D			
320	立憲政体略 加藤弘蔵	1	D			
321	長崎府医学校規則並附録 木活本	1	D			
322	掌中・新貨条目便覧 銅版色付袋入	1	D			膳51
323	五番綴謡本 須原屋茂兵衛	30	D	1055~1083		膳26
324	鹿児島県治一覧表 銅版図入	1	D			膳52

「分類」の覧、A・B・C・Dは古典蒐報に記載されている項目を示す。

- A 口絵の部
- B 地図の部
- C 稿本及び写本の部
- D 版本の部

県図書館寄託目録No.

日南高校より昭和44年に寄託され、
嶮南文庫の目録No。
(絵図・・・)は寄託時の整理No.

日南市寄託目録No.

日南高校より昭和53年に寄託され、
飫肥城歴史資料館に収蔵されている

「その他」の覧、「宮大紀要」「清武町史」「日向国史」は以下の書籍に掲載されている。

- ・「宮大紀要」は黒江一郎「平部嶮南詩集」(『宮崎大学教育学部紀要・人文学科28』昭和45年)
- ・「清武町史」は『清武町史資料編1』。宮崎県文献史料研究会所蔵の「清武二十七人頭功録」を所収
- ・「日向国史」は喜多定吉・日高重孝『日向国史』(1929年出版)の第九編第四章第二節「管轄」の項目に掲載。
- ・「膳」は「嶮南先生遺稿年譜蔵書目録」(日南市所蔵)、伊東祐淳氏より寄贈された文書群に含まれていた。膳写印刷(ガリ版印刷)で編集者及び編集年は不明だが「古典蒐報」に近い頃と考えられる。

・「大正4目録」は「宮崎県史料展覧会目録」

表2 「古典菟報」の絵図 (No.29) と「県図寄託」絵図との対比表

「古典菟報」掲載No.29の枝番資料				県図寄託
枝番	資料名	数	分類	No.
29の1	南方村	1	B	1465
29の2	北方村	1	B	1457
29の3	上北方	1	B	1498
29の4	下北方	1	B	1466
29の5	郡郡司分	1	B	1473
29の6	池内	1	B	1494
29の7	船曳	1	B	1468
29の8	宮王丸	1	B	1476
29の9	金崎	1	B	1496
29の10	今泉	1	B	1506
29の11	熊野	1	B	1493
29の12	恒久	1	B	1472
29の13	加江田	1	B	1458
29の14	江田	1	B	1520
29の15	跡江	1	B	1474
29の16	細江	1	B	1477
29の17	鹽路	1	B	1470
29の18	福島	1	B	1502
29の19	島ノ内	1	B	なし
29の20	堤内	1	B	1471
29の21	内海	1	B	1467
29の22	廣原	1	B	1522
29の23	柏原	1	B	1485
29の24	江平町	1	B	1495
29の25	花ヶ嶋町	1	B	1489
29の26	山崎	1	B	1464

「古典菟報」掲載No.29の枝番資料				県図寄託
枝番	資料名	数	分類	No.
29の27	加納	1	B	1483
29の28	生目	1	B	1475
29の29	大塚	1	B	1481
29の30	大田	1	B	1490
29の31	浮田	1	B	1504
29の32	野田 (田野?)	1	B	1450
29の33	田吉	1	B	1460
29の34	宮浦	1	B	1491
29の35	富吉	1	B	1479
29の36	伊比井	1	B	1480
29の37	富士	1	B	1459
29の38	古城	1	B	1462
29の39	上別府	1	B	1488
29の40	新別府	1	B	1487
29の41	長嶺	1	B	1478
29の42	大瀬町村	1	B	1482
29の43	鏡州	1	B	1509
29の44	木原	1	B	1461
29の45	折生迫	1	B	1505
29の46	記載なし	1	B	
29の47	記載なし	1	B	
29の48	記載なし	1	B	
29の49	記載なし	1	B	
29の50	記載なし	1	B	
29の51	記載なし	1	B	
29の52	記載なし	1	B	

表3 「古典菟報」の絵図 (No.37) と「県図寄託」絵図との対比表

「古典菟報」掲載No.37の枝番資料				県図寄託
枝番	資料名	数	分類	No.
37の1	船越図	1	B	1511
37の2	社ヶ原の図	1	B	1512
37の3	祝子村之内	1	B	1486

表4 「県図寄託」地図の内、「古典蒐報」に記載が無い地図

宮崎県図書寄託収蔵	
資料名	No.
[鹿児島県図]	1515
江戸城図	1516
北方村図	1463
船曳、別府田野	1469
第十三大区古城ノ図	1484
新名爪村図	1497
日向国那珂郡宮崎郡之内四枚	1499
那珂郡第9大区楠原村	1500
油津ヨリ大嶮迄海上道法二里の図	1514
[高城郷]	1518
飫肥城図（飫肥城周辺、明治頃）	1519
高城戦図	1521

表5 「県図寄託」書籍の内、「古典蒐報」に記載が無い書籍

宮崎県図書寄託収蔵		謄写版
資料名	No.	No.
農業全書 「代官方」と墨書	1045～1054	謄16
蕉風協奏集 蔵書印なし	1087	
新板改正・大学（大学章句）	1088	
塵却	1089	
君子訓	1098～1100	謄15
古文尚書標註	1140～1145	
孝経啓蒙	1150	謄32
足利将軍伝	1151	謄33
東客事客	1152	謄34
木門十四家詩集	1153～1155	謄36
合類大節用集	1164～1173	謄18
魏叔子文遷要	1174～1176	
日本地誌提要	1255	謄54
王陽明文粹	1345～1348	
物理小学	1351～1353	謄56
楚秘抄講義	1375～1377	
装束図解	1388～1389	
宮殿調度図解	1390～1391	
公事根源新釈	1392～1393	
大統歌	1395	
東征記行	1396	
京絵図	1400	
宕陰先生年譜	1402	
欽定三希堂	1407	
梧窓漫筆 三編 上巻	1408	謄14
謹上	1422	
実藤河	1433	
日向私史	1585～1590	

表6 謄写版目録のみに記載されている嶠南蔵書

謄写版目録	
資料名	No.
新政雑記 2冊	謄9
琉球事略 1巻	謄35
佩弦齋稿 青山延光著 一冊	謄41
標記職学抄校本 一冊	謄43

日向が生んだ歌人の若山牧水の文学とその意義

—シン・牧水のために—

歌人・若山牧水研究家

伊藤 一彦

目次

- 一 牧水の祖父・祖母と水野栄吉
- 二 江戸後期及び明治期の坪谷
- 三 坪谷時代の牧水
- 四 生誕一四〇年の牧水とその意義

第一章 牧水の祖父・祖母と水野栄吉

若山牧水の伝記については大悟法利雄著の『若山牧水伝』（一九七六・短歌新聞社）が重要である。大悟法利雄は牧水の高弟であり、その叙述は詳細で、文体は簡潔である。

その後も牧水研究は続いている。それらの新しい資料も紹介しながら、日向と牧水について記してみたい。

若山牧水は明治十八（一八八五）年に今の宮崎県日向市東郷町の坪谷に生まれた。父親は立蔵、母親はマキである。三人の女の子の後に生まれた長男で、本名は繁である。

父親は医師で、その父の健海（吉五郎）が医師であり、父の仕事を継いだのである。牧水の祖父にあたるこの健海は牧水の人生と文学を考えるうえでまことに重要である。従来の伝記でももちろん一応触れられてはいるが、その重要さは格別と言える。牧水が三十代半ばに幼少期を回顧して書いた「おもひでの記」（『比叡と熊野』所収）にわざわざ一章をもうけて「祖父の事」を記している。抜粋して一部分を引く。

私の祖父は武蔵川越在の農家の出で、幼時より江戸に出て両国の生薬屋に奉公してゐた。（中略）肥前まで行って其処でシイポルトに仕へて多年の間医学を学んだ。当時蘭学または洋医学を修めたと云へばかなり大したものであつたに相違ないが、それがどうして日向の様な田舎へ引きこもつたか不思議である。当人の言ふところによると江戸に帰る途中、難船して日向の地に吹き着けられたといふのであるが、これは無論嘘である。おもふに何かさうしたヒトに知られぬ山の中へ隠れ度いか又は隠れねばならぬ必要があつて引き込んだものに相違ない。彼は日向に居着いてから

も一度も郷里へ帰らなかつたばかりでなく、音信すら為さなかつた。（中略）彼は初め細島美々津と云ふ海岸の港町に業を開かうとし、更にそれより山地に入り込んで私の故郷である坪谷村に來り、土地の旧家である酒造屋としてゐた奈須家の女を娶り、其処に居を定めた。

祖父の健海は牧水が三歳のときに亡くなつてゐる。したがつて直接の記憶はないと牧水みずから記している。右の「祖父の事」の内容も後に家族や周囲から聞いた話である。逆に言えば、家族たちに健海という人がどのように理解されているかを示している。

牧水は、西洋医学を修めた「大した」人が、どうして日向の様な田舎へ引き籠もつたか不思議である」と記しているが、前記の大悟法利雄著『若山牧水伝』は「祖父若山健海」の章で次のように述べている。

とにかく健海は右のようにして儒学を学び西洋医術を学んだ。その彼が日向の山奥に住みつくことになつた経緯については福島町（現串間市）に住んでいた水野栄吉という人がその祖父水野栄吉（同系は代々同名）が江戸にいた頃健海と親しくなり、日向に來るように勧めたのだと語つていたが、後に記すように健海は坪谷に住んでからその水野家と縁組みしていることなどから考えてもこれは信じてよいと思われる。

右の文章で「後に記すように」と書かれている部分をやはり「祖父若山健海」の章から引く。

健海が結婚したのは天保十三年三十二歳のときで、その妻はカメと呼び文政九年八月二十二日生れだから当年十七歳であつた。

彼女は美々津に生れたが、その母が女の子三人ぐらいをつれて隣村下三箇の水野栄吉のところの後妻に来ていたものであった。(牧水の「おもひでの記」に「土地の旧家で酒造家つくりざかやをしてゐた奈須家の女むすめを娶り」とあるのは水野家の誤り。そして、水野家の戸籍は右の通り現在東郷町の内になつてゐる下三箇であるが、坪谷の牧水の生家から程遠からぬところにその水野家の跡というのがあり古い井戸なども残つてゐるから、実際は相当以前から坪谷に住んでいたのかも知れない(後略)

以上は牧水の祖父健海についての基礎資料である。健海についておおよその理解はできるが、さらに健海の日向移住、また水野栄吉との関わりについてもさらに知りたくなる。日向市の若山牧水顕彰会会長の那須文美が発表した『石ぶみ』が語る―歌人牧水誕生のキーマン『水野栄吉』の実像―(「牧水研究」第十九号、二〇一五年(二月)は、その要望に応えてくれる待望の文章だった。

那須はまず、牧水没後七回忌の昭和十年に延岡市で開催された、「牧水を語る座談会」を取りあげて紹介している。

「牧水を語る座談会」出席者の一人で牧水の母マキの弟長田勘禅は次のような発言を残している。

「若山家は元来坪谷にあつたものです。牧水の祖父にあたる人が埼玉の医師の子で、長崎に蘭学を研究にきての帰路高千穂を見学して坪谷の若山家に一泊したのが縁で、遂に同家養子となりこれにできた子が牧水の父の若山龍蔵(立蔵)なんです」と述べている。この座談会は健海没後五十年、牧水没後七年、母マキ没六年後の開催で、一部に記憶違いや誤解もあるようだが、母マキの弟という極めて身近な親族の話だけに貴重な記録である。

健海が長崎で学んだあと、どのコースで日向の国に入ったかいくつかの説があるが、長田は高千穂經由だと言つてゐる。それが天保七年、彼が二十六歳の時だったことは、別の資料からはつきりしてゐる。このとき、後に健海の妻となる、水野の長女カメ(妻の連れ子三人の長女)は十一歳だった。

那須は健海とカメの結婚の経緯について次のように述べてゐる。

先の延岡座談会記録の長田勘禅談話と絡めて推察すると、水野は初めから健海を水野家の家族同様に受け入れ、ゆくゆくはカメの適齢期を待つて結婚させるつもりであつたとみられる。事実、坪谷に来て六年後、健海三十二歳カメ十七歳で結婚している。

長田勘禅による「坪谷の若山家養子説」は、養子同然で水野家に入り長男誕生を期に若山医院を建てたことに基づく発言であるう。(中略)

推論を説明する根拠の一つに、増進会「牧水全集第七号」の「月報」に収録された牧水長男旅人の記述に「健海は美々津生まれのカメを娶り、弘化三年には谷の上流の坪谷村に移つてゐる」の一文がある。

長崎からはるばる日向の国坪谷に着任後、先ず現在の日向市東郷町下三ヶ深谷の水野家で医業を開始、結婚を経て長男も誕生した十年後、坪谷側上流の坪谷一番戸に新築開院したのである。

以上で、若山健海が日向を訪れてからのことはおおよそ判明したと言える。水野栄吉との縁が決定的である。ところが、水野栄吉についてはほとんど資料がない。前記の那須文美の『石ぶみ』が語る」がその点でまことに貴重である。次に紹介してみたい。

那須文美は資料のほとんどない水野栄吉について、地元に住む者の利点を生かし実地調査を行った。

江戸で知り合った健海を迷うことなく未知の日向の国に走らせた水野栄吉の役割は重要である。

そこで、水野に関する資料探しの最後の手段として着目したのが東郷町下三ヶ深谷地区に点在する水野家銘の墓石、そしてようやく辿り着いたのが、棚田の畦道に沿う小さな墓地の片隅の苔むした墓石に見出した「水野栄吉」と「ヒサ」の刻字である。

那須は墓石の基部を埋めた土を除き、背丈ほどの草を払って墓碑を読むことができた。そこから次のようなことがわかったという。

嘉永七（一八五五）年六十八歳没の刻字から、水野の生年は一七八七年と断定。

一方、俗名ヒサの墓石は「建立若山カメ」の刻字から妻ヒサと判断。行年及び没年号から、一七九五年生と断定する。

これら新出資料を整理すると、文化八（一八一）年生まれの水野の海に対して二十四歳年長の水野、そしてヒサは一六歳年長となる。

思いがけない年齢差の健海と水野。その二人の繋がりは……。

あくまで推測だが、十五歳の健海と三十九歳の水野との江戸での出会いはこれまで大方の推測だった「故郷・家族から遠く離れた少年同士の間での交流」ではなく、二歳で父を亡くした健海にとって「父のような存在」であった水野の姿が浮かぶ。

一方、水野は、聡明で才能豊かななかに孤独な影を宿す少年健海に「我が子」の如き親しみを持ったと考えれば、所沢の叔母夫婦に跡継ぎが生まれ、自分の居場所を失った若山家ではなく、迷いなく水野が住む日向の国を目指した健海の行動も理解できる。

右の説明を納得しつつ私は読む。そして、那須は右の自説をさらに補強すべく、健海が生薬屋で働いていたときに、水野の故里の坪谷など尾鈴山一体が山村資源が豊富で薬草の宝庫であるとの情報を得ていた可能性を指摘するのである。

二 江戸後期及び明治期の坪谷

それでは、健海が訪れたころの坪谷はどんな地域であったかを知りたくなる。そこで「牧水研究会」のメンバーが那須文美の協力を得て、地元の古老の座談会を開いたことがあり、その記録を掲載した「牧水研究」第六号（令和六年、二〇二四年十二月）が貴重である。出席してくれたのは郷土の歴史研究家の矢野宝蔵を初め、若山家とかつて親しかった隣人、友人の子孫たちである。私もその場において話を直接に聞いたのでよく覚えている。坪谷に対する見方を一変させる衝撃的な話が矢野宝蔵から語られた。

健海さんがなんで住居を石原（いしはら）牧水生家が残っている場所の（しんが）に構えたかということは私の考えですが、当時の坪谷地域は下三ヶ（しもさんか）も含めて、山林資源がものすげ豊富で木炭・椎茸・木材・楮・三つ又の紙漉屋もそこらに大正まであったんですが、いろんな山林資源が豊富で当時は天領の支配であったが、山陰（やまかげ）と比べると裕福な地域だったということが感じられるんです。

当時の坪谷地域の生活状態は、この地域に鍛冶屋があり、金物屋があり、お医者さんはもちろんいろんなものがあり、日向市の街まで買いに行かんでもこの地域で全部買え、商店が並んでたんですね。今は坪谷から日向に持って行かんと物は売れんですね。その当時は日向からどんどん買いに商人が入りみだれて来ったのです。

そういう経済状態だったわけです。江戸時代の後期から明治時代

ずつと続いているわけです。そういうこともあって健海さんが住まいを据えたと思うんです。なにも健海さんが逃げ隠れして住まいを構えたのではなくて、坪谷に魅力を感じてここならやって生けると考えられたんじゃないかと思うわけです。

この話を矢野宝蔵さんから地元言葉で聞いたときの衝撃は今でもしつかり記憶に残っている。現在の見方でいうと、特に都会の人は坪谷について交通機関も不便で人里離れた奥地のように思うかも知れないが、実は経済も発達し店も多く豊かであったということをお教えられると、健海が単に水野栄吉がいただけではなくてこの地に移り住んだ理由がわかる気がする。

この矢野発言だけでなく、座談会では数多くの貴重な話があった。出席者は残念ながら現在はずべて故人となられた。当時すでに高齢者であった。今あらためて感謝を捧げつつ、座談会の発言の重要な個所を引いておきたい。箇条書きにして、誰の発言かは略する。詳しく見たい方は「牧水研究」第六号を見ていただきたい。県立図書館には「牧水研究」のバックナンバーが創刊号から揃っている。

- ・天領気質というか、そういう気質を特に強く受け継いだ人が坪谷にはたくさんいるんで村の中心になって分村運動を起したりとか、いろんな活動をしている人たちがいる。

- ・分村運動は明治二〇年ですかね。どうも他の地域の人たちは風習やいろんな面で気が合わんと。坪谷・下三ヶでやっていけると、分村運動を県に三回出したけど、脚下されたんです。その第一回目の運動は、牧水の父の若山立蔵さんが代表になっており、その記録があるんですよ。

- ・坪谷には濡れ草鞋（他国者）の人が多くいますよ。その人たちは温かく迎える、分け隔てなくという気風がある。泊まらして

くれという人がよく来よったそうです。坪谷の人たちは豊かだったんだろうと。

- ・坪谷地域には鉱山跡が八カ所ぐらいあったとです。だから鉱脈が走っていることは間違いないですよ。その時代に立蔵さんがそこに目をつけたんですからね。

- ・牧水のおばあさんがよくお酒を飲んでいたそうですけど、うちの婆ちゃん達はオナオばあさん、オヨシばあさん、オダエばあさん、オカズおばさん、四人集まっていたい飲みよったです。やっぱお酒を飲めるといふのはある程度豊かでない。食べ物も確保して。お酒の種類は焼酎です。甲焼酎です。

- ・牧水歌碑建立を坪谷で計画したのは昭和の初期のころで、坪谷地域に「文学少年六人衆」といわれる六人がおりやっつたんです。

- ・六人衆はぐん・でん・だん。や・もと・まつで、すなわち日高軍治さん、黒木伝松さん、矢野団治さん、中野純一郎さん、中野元吉さん、松久さんです。しかし、戦時中に入って拙いということになって、そして、昭和二十年になって、坪谷が二つに分かれたということ。矢野力治さんの方がよっぽど坪谷のためになつとるじゃねえか、牧水が何をしたつか、ということ。そして、六人衆が、いやこの終戦の混沌とした中で力治さんもじゃけど、牧水はこころを歌った方で、まず牧水を取り上げようやということ。話が進んで昭和二十一年の十一月に計画し、二十二年七月に歌碑除幕式と祝賀会をしたんです。

- ・道路開発は過疎をつくるとも言われちよるですがね。県道が明治三十年にできて三十三年に神門^{みかど}までぬけちよるです。それからだんだん日向の人が入りこんできて店が来るようになって、終戦後にはほとんどそんな店もなくなってしまうたすね。

- ・山の形態がですよ、牧水の時代は針葉樹が少なく広葉樹で、昔は植材すくなくですよ。山桜の満開時には見事なもんじやつ

たですよ。牧水さんの時代には、尾鈴連峰を見てもですね、歌でも出そうな山じゃったとですがね。

三 坪谷時代の牧水

そのような坪谷で牧水がどのような幼少期をすごしたかは、当の牧水が詳しく書きとめている。「おもひでの記」である。大正八年出版の『比叡と熊野』に収められている。次の各章ににわかれている。

「庭梅」

「牡丹桜」

「祖父の書」

「坪谷村」

「名づけ」

「三人の姉」

「遊戯(その一)」

「遊戯(その二)」

「母の事」

「海」

「濡草鞋」

「父の事」

「五本松峠」

「三人の叔父」

「正月、お盆、祭祀」

どの章も牧水理解のためにきわめて重要でよくぞ書き残しておいてくれたと今日のわれわれは思う。牧水が三十四歳の大正七年に当時の短歌総合誌「短歌雑誌」に五回にわたって連載されたものである。『若山牧水全集』はもちろん、多くの選集に収められており、

誰でも容易に読むことができるし、ぜひ読んでほしい文章である。

故郷を深く愛していた牧水は「おもひでの記」の他にも多くの文章を記している。主なものをタイトルだけあげておきたい。「秋草の原」「雪のおもひ出」「故郷の正月」「藤の花」「鮎釣りに過ごした夏休み」「耳川と美々津」「父も母も若い俤」などである。

坪谷の少年時代の牧水について最近新しい資料が見つかった。大坪隆昭美郷町教育長の尊父大坪弥次郎が昭和三十年代に日本大学文学部の卒業論文に執筆した「若山牧水の研究―郷土との関連を中心として―」を二年前に読む機会があった。研究と調査の行き届いた論文で、まだまだ牧水評価の低かった時期に意義深い。その論文はいま牧水記念文学館に展示されている。その労作のなかから今は一箇所だけ紹介したい。それは牧水の坪谷小時代の友人の聞き書きの部分である。牧水は「おもひでの記」に先に述べたように幼少期の記憶を細かく記しているが、実は級友はほとんど出てこないのである。それは級友と言えるような存在がいなかったからである。父親と釣りをしたり、母と山に出かけたりしているが、級友と遊んだ場面は出てこない。大坪論文は牧水に親しい級友がいたことを教え、その級友を訪ねてインタビューをしているのである。その級友は西口太助と言い、インタビュ―当時の年齢は八十歳ぐらいだった。論文には西口の写真も貼つてある。坪谷小学校で一学年下だったという西口の言葉を引いてみる。

わしは姉二人、妹三人の六人兄弟で、父は山師、家は掘立の山小屋で貧乏暮らしでした。牧水さんは友だちはそういっていませんでしたが、わしとはよく遊びました。通学路が一緒だったからでもあります。ある日わしが椿の花を学校に持っていったところ、「そりゃ何処にあったか」とききせがみ、その日一緒にとりに行きました。それがきっかけで学校が終わると待ち合わせてよく山遊びしたものです。

くすもり山がよい遊び場でした。おそくなると、うちの不味いから芋飯をうまいうまいと食べ泊ったことも何度かあったはずです。わしも牧水さんの家でご飯を食ったことがあります。米飯に魚菜の旨かったことが今でも忘れられません。母親のマキさんは「うちの繁と太助ちゃんは骨がなければ一つになるほどの仲じゃ」と言っていて笑ったものです。このおつかさんがよくできた人で産婆さんでしたが村人の面倒をよくみていました。特にわし等のような貧乏人に親切で古着や食べ物届けたり、それは情深い人でした。牧水さんは偉くなって帰った時も逢いに来いと何度か使いをよこしました。が、なにしろ貧乏でしたから一度ぐらいしか逢っていません。

少年牧水の椿の花への関心、分け隔てのない友だち付き合い、そして母親マキの温かい人柄を伝える、他では見たことのない興味深いエピソードである。大坪弥次郎の卒業論文の貴重さをあらためて思う。

四 生誕一四〇年の牧水とその意義

一八八五年生まれの牧水にとって二〇二五年は生誕一四〇年であり、さまざまな企画行事や出版があった。

愛媛県今治市では、生誕一四〇年を記念しての全国牧水顕彰大会が開催された。牧水の歌集『みなかみ』を誕生させた岩城島のある今治の大会は全国から多くの牧水ファンが集まった。

県内では日向市、延岡市、宮崎市で各地の特色を生かした講演会やシンポジウムが開かれた。また、宮崎日日新聞は生誕一四〇年記念の「牧水のカタチ」の長期連載を三部にわたって行なった。またUMKテレビは「牧水のみち―堺雅人と吉田類が愛した歌人―」の特別番組を放映した。いずれも反響を呼んだ。

歌壇の短歌総合誌の「短歌」七月号は「生誕一四〇年若山牧水ルネサンス」の特集を組んで注目された。次のような内容である。

インタビュ― 堺雅人

座談会「牧水のまだ見ぬ魅力に迫る！」

伊藤一彦・小島なお・乃上あつこ・本多稜

論考 きはみなきいのちの歌 伊藤一彦

風土と自然の描写 吉川宏志

愛のうた 糸川雅子

歌集の魅せ方 綾部光芳

新しい牧水 河路由佳

牧水短歌におけるポエジー 蜂飼 耳

文芸史の中の牧水 三浦雅士

特集タイトルの「若山牧水ルネサンス」が編集部意图をよく表しており、各執筆者も牧水の新しい評価によるルネサンス（復興）の期待にこたえている。

また、二〇二五年は北原白秋の生誕一四〇年でもあった。そこで「短歌往来」五月号は「白秋・牧水生誕一四〇年」の特集を組んで注目された。

論考 直情（牧水）と象徴（白秋） 藤岡武雄

白秋と牧水、それぞれの創意工夫 高野公彦

只管と暢達 伊藤一彦

牧水の動・白秋の静 大辻隆弘

歌の懐かしさと鮮度 内藤 明

響き合った二人 中村佳文

鐘の音をききながら 片山佳代子

混ざりあう五感 小島なお

白秋の雀、牧水の仏法僧 久永草太

二〇二六年は石川啄木の生誕一四〇年である。牧水と白秋と啄木

の重なった詩歌の青春がさらに論じられると思う。

最後に、生誕一四〇年を記念して刊出された『若山牧水全歌集』（角川文化振興財団）についてふれたい。五十年前に大悟法利雄編『若山牧水全歌集』（短歌新聞社）が出版されており、貴重な労作だが、残念ながら若干の誤りや不備な箇所があり、より完全な全歌集の出版が望まれていた。そこで私は角川書店の北田智広「短歌」編集長と相談して新しい全歌集を出版する計画をたてた。二年間の準備を経て出版にこぎつけることができた。その内容は次の通りである。

まず、当然ながら十五冊の歌集の初版の完全収録である。即ち『海の声』『独り歌へる』『別離』『路上』『死か芸術か』『みなかみ』『秋風の歌』『砂丘』『朝の歌』『白梅集』『さびしき樹木』『溪谷集』『くろ土』『山桜の歌』『黒松』の十五冊である。

この十五冊については各歌集一ページの「解題」を記した。なお、牧水には歌集未収録の秀作も多く、それらは「歌集未収録歌篇」として収めた。先の全歌集出版後に見つかった「新作」も入れてある。その代表として次の一首を引いておきたい。

降ればかくれ曇ればひそみ晴れて照るかの太陽を
こころとはせよ

牧水の遺墨蒐集家であった故小林邦雄の遺族から宮崎県立図書館に寄贈された半折の作品である。牧水の生涯変わらなかつた向日性を伸びやかな文体で歌っている。

この度の『若山牧水全歌集』の特色として、過去の牧水論の代表的な作品を収録していることがある。

川端康成 若山牧水と湯ヶ島温泉

若山峻一 牧水について

若山喜志子 病床に侍して

釈迢空 牧水詠歎

塚本邦雄 この夜星降れ―若山牧水論

玉城 徹 牧水後期作品について

馬場あき子 『別離』の表現

佐佐木幸綱 時分の花としての『別離』

本村勝夫 初期の牧水短歌と茂吉

稲田定雄 牧水とロシア文学

大岡 信 牧水が立派だったと思うこと

島内景二 若山牧水の近代

いずれも味読し、牧水をどう評価するか、大きな刺激を与えてくれるものばかりである。

第二次世界大戦が終了して八十年後の今日の世界は周知のように危機的状況である。大国のエゴイズムが目立ち、自然破壊が進行している状況に心を痛めざるを得ない。今こそ文学や芸術が果たすべき役割がある。牧水の文学もまさしくそうである。最後に大岡信の「牧水が立派だったと思うこと」から次の一節を引いて拙文を閉じたい。

自他の区別ばかりしたが今の人とは違って、牧水のように胸を開いて、自然界を自分の中へ入れてしまつて、その自然界に皆さん触つてごらんさいといつて見せてくれる、そういう歌人が今はいなくなつちやつた。これは時代の影響です。非常に大きな時代の影響、そういう意味では、牧水は過去の人に見えますけれど、実は未来の人なんです。

org/10.1093/biolinnean/blx076

- Masuda, R. and M. C. Yoshida. (1994.) Nucleotide sequence variation of cytochrome b genes in three species of weasels *Mustela itatsi*, *Mustela sibirica*, and *Mustela nivalis*, detected by improved PCR product-direct sequencing technique. *J. Mamm. Soc. Japan* 19: 33-43.
- Ohashi, H., Saito, M., Horie, R., Tsunoda, H., Noba, H., Ishii, H., Kuwabara, T., Hiroshige, Y., Koike, S., & Hoshino, Y. (2016) . Differences in the effects of environmental factors on the distribution of two deer species in Japan. *Ecology and Evolution*, 6 (12) , 4171–4183. <https://doi.org/10.1002/ece3.2514>
- Ramírez-Fráncel, L. A., García-Herrera, L. V., Losada-Prado, S., Reinoso-Flórez, G., Sánchez-Hernández, A., Estrada-Villegas, S., Lim, B. K., & Guevara, G. (2022) . Bats and their vital ecosystem services: A global review. *Integrative Zoology*, 17 (1) , 2–23. <https://doi.org/10.1111/1749-4877.12552>
- Suzuki, K. K., Tsunoda, H., Kamiyama, R., Watanabe, A., & Koike, S. (2022) . Long-term monitoring of sika deer density by pellet group count in Kyushu, Japan. *Forests*, 13 (5) , 760. <https://doi.org/10.3390/f13050760>
- Suzuki, K. K., Yasuda, M., & Sonoda, M. (2022) . Spatially biased reduction of browsing damage by sika deer through culling. *The Journal of Wildlife Management*, 86 (6) , e22251. <https://doi.org/10.1002/jwmg.22251>
- Takatsuki, S. (2009) . Effects of sika deer on vegetation in Japan: A review. *Biological Conservation*, 142 (9) , 1922–1929. <https://doi.org/10.1016/j.biocon.2009.02.011>

- の同定, 頭骨の特徴および mtDNA 解析に基づく系統的な位置づけ. 哺乳類科学 62 (2) :239-245. <https://doi.org/10.11238/mammalianscience.62.239>
- 船越公威, 衣笠淳, 渡邊啓文, 江崎真南, 奥谷公亮 (2024b) 福岡県で初めて発見されたモリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi* の音声, 形態的特徴および mtDNA 塩基配列(CO1) に基づく遺伝的解析. 北九州市立自然史・歴史博物館研究報告 A 類 (自然史) . 22:36-40.
- 船越公威, 岩切康二, 古中隆裕, 奥谷公亮 (2024a) 宮崎県椎葉村のコウモリ相と新たに発見されたモリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi* について. 宮崎の自然と環境 9:91-95.
- 増田隆一 (2024) ハクビシンの不思議. 東京大学出版会, 東京. 123pp.
- 宮崎県 (2020) 三訂, 宮崎県版レッドデータブック 宮崎県の保護上重要な野生生物.
- 宮崎県 (2022a) 宮崎県第二種特定鳥獣 (ニホンザル) 管理計画 第 3 期.
- 宮崎県 (2022b) 宮崎県第二種特定鳥獣 (ニホンジカ) 管理計画 第 3 期.
- 安田雅俊 (2013) 霧島にクリハラリスが定着か. リストムササビ 30:15.
- 安田雅俊 (2017) 九州に定着した特定外来生物クリハラリスの由来と防除. 第 49 回大会公開シンポジウム記録「外来生物: 私たちの問題」. 森林野生動物研究会誌 42:49-54.
- 野生動物保護管理事務所 (1989) 昭和 63 年九州地方のツキノワグマ緊急調査報告書. 野生動物保護管理事務所, 川崎. 140pp.
- 横田直人, 長岡壽和 (1998) 高崎山のニホンザルの個体数増加と森林への影響. ワイルドライフ・フォーラム 3 (4) :163-170.
- 渡邊邦夫, 三谷雅純 (2019) 日本列島にみる人とニホンザルの関係史—近年の急激な分布拡大と農作物被害をもたらした歴史的要因—. 人と自然 30:49-68. <https://doi.org/10.24713/hitotoshizen.30.49>
- 渡邊邦夫, 本田剛章, 三戸幸久 (2023) 竹下完氏による 1970 年におけるニホンザル分布アンケート調査結果. 霊長類研究 39:77-83. <https://doi.org/10.2354/psj.39.013>
- Aguiar, L. M. S., Diniz, U. M., de Carvalho, W. D., da Rocha, P. A., Dias, D., de Oliveira, H. F. M., de Moraes Neto, S. P., & Bernard, E. (2021) . Urban bats' diet and pest control potential in an agroecosystem assessed by DNA metabarcoding. PLOS ONE, 16 (9) , e0258066. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0258066>
- Ancillotto, L., Capozzi, F., Russo, D., Giacomini, G., Trucchi, C., & Cistrone, L. (2024) . Bats provide valuable protection from pests in organic apple orchards: Results from an exclusion experiment. Journal for Nature Conservation, 78, 126558. <https://doi.org/10.1016/j.jnc.2024.126558>
- Boyles, J. G., Cryan, P. M., McCracken, G. F., & Kunz, T. H. (2011) . Economic importance of bats in agriculture. Science, 332 (6025) , 41–42. <https://doi.org/10.1126/science.1201366>
- Dinets, V., & Asada, K. (2020) . Noble savages: human-independent Rattus rats in Japan. Journal of Natural History, 54 (37–38) , 2391–2414. <https://doi.org/10.1080/00222933.2020.1845409>
- Ichioka, M., & Hijii, N. (2021) . Raccoon predation on foam nests and breeding adults of *Buergeria japonica*. Current Herpetology, 40 (2) , 129–133. <https://doi.org/10.5358/hsj.40.129>
- Kawamoto Y, Shotake T, Nozawa K, Kawamoto S, Tomari K, Kawai S, Shirai K, Morimitsu Y, Takagi N, Akaza H, Fujii H, Hagihara K, Aizawa K, Akachi S, Oi T, Hayaishi S. Postglacial population expansion of Japanese macaques (*Macaca fuscata*) inferred from mitochondrial DNA phylogeography. Primates. 2007 Jan;48 (1) :27-40. doi: 10.1007/s10329-006-0013-2. Epub 2006 Nov 22. PMID: 17119867.
- Kuwayama, T., Nunome, M., Kinoshita, G., Abe, K., & Suzuki, H. (2017) . Heterogeneous genetic make-up of Japanese house mice (*Mus musculus*) created by multiple independent introductions and spatio-temporally diverse hybridization processes. Biological Journal of the Linnean Society, 122 (3) , 661–674. <https://doi.org/10.1111/bjls.12222>

- 金川弘哉, 岩切康二 (2025) 宮崎県の鉄道高架橋でみつかったヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の哺育集団. 宮崎の自然と環境 10:54-57.
- 上谷川則男 (2019) オオカミの生息を江戸時代の記録に探る. 宮崎の自然と環境 4:77-79.
- 上谷川則男 (2020) 川内川上流の魚類, 両生類, 爬虫類, 哺乳類の記録. 宮崎の自然と環境 5:20.
- 川田伸一郎, 岩佐真宏, 福井大, 新宅勇太, 天野雅男, 下稲葉さやか, 樽創, 姉崎智子, 横畑泰志 (2018) 世界哺乳類標準和名目録. 哺乳類科学 58 (別冊) :1-53. <https://doi.org/10.11238/mammalianscience.58.S1>
- 環境省 (2016a) ニホンザル特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル (種別編)
- 環境省 (2016b) ニホンジカ特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル (種別編)
- 環境省九州地方環境事務所, 熊本県, 宮崎県, 鹿児島県, 農林水産省九州農政局, 林野庁九州森林管理局 (2025) 九州中南部エリア・アライグマ広域防除戦略.
- 五代秀亮, 橋口兼柄 共編. 三国名勝図会 : 60 卷 18 (卷之 52-54), 山本盛秀 (1905), 10.11501/992148. <https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000039-I992148>
- 五代秀亮, 橋口兼柄 共編. 三国名勝図会 : 60 卷 19 (卷之 55-57, 山本盛秀 (1905), 10.11501/992149. <https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000039-I992149>
- 五代秀亮, 橋口兼柄 共編. 三国名勝図会 : 60 卷 20 (卷之 58-60), 山本盛秀 (1905), 10.11501/992150. <https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000039-I992150>
- 小柳恭二, 瀧井暁子, 泉山茂之 (2023) 音声解析を用いた高高度飛翔型希少コウモリ類の分布調査と信頼性. 信州大学農学部 AFC 報告書 21:1-14.
- 島村咲衣, 安藤正規, 鶴田燃海, 永田純子, 浅野玄, 大橋正孝, 鈴木正嗣, 小泉透 (2020) マイクロサテライトマーカーによるニホンジカ野生集団の遺伝構造および母性解析. 哺乳類科学 60 (1) :55-65. <https://doi.org/10.11238/mammalianscience.60.55>
- 森林研究・整備機構 (2003) 農林業における野生獣類の被害対策基礎知識—シカ、サル、そしてイノシシー.
- 杉山幸丸, 渡邊邦夫, 栗田博之, 中道正之 (2013) 霊長類学の発展に餌付けが果たした役割. 霊長類研究 29:63-81. <https://doi.org/10.2354/psj.29.011>
- 常田邦彦 (2016) 日本の狩猟及び鳥獣保護制度の変化と 2014 年の鳥獣保護法改正. 特集: 法改正に伴う野生動物医学の役割と未来~大きな変換期を迎えた野生動物対策~. 第 21 回日本野生動物医学会大会 日本野生動物医学会主催シンポジウム. 73-79.
- 西田伸, 川原一之, 安河内彦輝, 江田真毅, 小池裕子, 岩本俊孝 (2022) 宮崎県高千穂町における「熊の手」の由来とその分子系統解析—九州, 祖母山系産ツキノワグマの DNA 解析—. 哺乳類科学 62 (1) :3-10. <https://doi.org/10.11238/mammalianscience.62.3>
- 福井大, 揚妻直樹, David A. HILL (2004) コウモリ類の種ごとの環境利用—音声による種判別を用いて—. 第 51 回日本生態学会大会 釧路大会 講演要旨集. <https://doi.org/10.14848/esj.ESJ51.0.386.0>
- 船越公威, 前田史和, 佐藤美穂子, 小野宏治 (1999) 宮崎県枇榔島に生息するオヒキコウモリ *Tadarida insignis* のねぐら場所, 個体群構成および活動について. 哺乳類科学 39 (1) :23-33. <https://doi.org/10.11238/mammalianscience.39.23>
- 船越公威 (2010) 九州産食虫性コウモリ類の超音波音声による種判別の試み. 哺乳類科学 50 (2) :165-175. <https://doi.org/10.11238/mammalianscience.50.165>
- 船越公威, 大澤達也, 永山翼, 佐藤顕義, 勝田節子, 大沢夕志, 大沢啓子 (2020) 九州新幹線高架橋で発見されたコウモリ類の生態, 特にオヒキコウモリ *Tadarida insignis* の人工ねぐらの利用と食性について. 哺乳類科学 60 (1) :15-31. <https://doi.org/10.11238/mammalianscience.60.15>
- 船越公威, 前田史和, 奥谷公亮, 江崎真南 (2022) 九州で初めて発見されたモリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi*

ニホンオオカミ (*Canis lupus hodophilax*) は、1905 年 (明治 38 年) に奈良県東吉野村鷲家口で捕獲された個体が国内最後の記録とされている。県内での生息記録は江戸時代の文書にその一端を垣間見ることができる。薩摩藩編纂の「三國名勝圖會」(五代・橋口 1843 [山本 1905 刊]) では、日向国の須木、高岡、綾、小林、飯野、高原、加久藤、吉田で「狼」の記述がある。また、薩摩藩士の名越時敏が 1864 年正月から 1867 年 4 月までの日記を綴った「名越時敏日史」(鹿児島県 2012) では、「山犬之穴狩」についての記載がある。上谷川 (2019) では、これらの記載を検討して、宮崎県南西部の山地には江戸時代の後期まで「狼」あるいは「山犬」と呼ばれたニホンオオカミが生息していた可能性を指摘している。

6-3. 絶滅危惧種

哺乳類の多くは広域分布で身近な種もいる一方で、環境変化や生息地の分断の影響を受けやすい種も少なくない。県の最新版のレッドリスト (宮崎県版レッドデータブック 宮崎県の保護上重要な野生生物・三訂版) によると、22 種が掲載されている。

絶滅種：ツキノワグマ、ニホンカワウソ

絶滅危惧 IA 類：クロホオヒゲコウモリ

絶滅危惧 IB 類：オヒキコウモリ、ニホンモモンガ、ヒナコウモリ

絶滅危惧 II 類：カワネズミ、ノレンコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ、スミスネズミ、ヤマネ、ニホンカモシカ

準絶滅危惧：モモジロコウモリ、ユビナガコウモリ、カヤネズミ、ムササビ、ニホンイタチ

情報不足：ヒメヒミズ、ハタネズミ

その他保護上重要な種：都井岬の岬馬、幸島のニホンザル

哺乳類の保全は、単に希少種を守るということではなく、森林、河畔林、河川、樹洞、岩壁、洞窟、里地里山といった多様な生息環境を健全に保全すると同時に、ヒトとの軋轢 (農林業被害や生活被害) を抑えながら共存する社会を構築することが重要である。

参考文献

- 相見満, 高畑由起夫 (1994) 日本の哺乳類 18 ニホンザル. シリーズ 日本の哺乳類 各論編. 哺乳類科学 33 (2) :141-157. <https://doi.org/10.11238/mammalianscience.33.141>
- 荒木良太, 佐藤那美, 小林喬子, 滝口正明, 平田滋樹, 小寺祐二 (2020) ニホンジカ (*Cervus nippon*) とイノシシ (*Sus scrofa*) の捕獲推進に伴い発生する錯誤捕獲に関する法令等及び各種計画の現状と課題. 哺乳類科学 60 (2) :327-334. <https://doi.org/10.11238/mammalianscience.60.327>
- 井上伸之 (2025) 宮崎県の山地荒廃と植物の状況. 宮崎の自然と環境 10:42-45.
- 岩本俊孝 (2000) 哺乳類. 宮崎県版レッドデータブック 宮崎県の保護上重要な野生生物. 226-233.
- 岩本俊孝 (2025) 九州における高標高地の森林植生に対するニホンジカ食害の発生史とニホンカモシカへの影響. 宮崎の自然と環境 10:46-53.
- 大西尚樹, 安河内彦輝 (2010) 九州で最後に捕獲されたツキノワグマの起源. 哺乳類科学 50 (2) :177-180. <https://doi.org/10.11238/mammalianscience.50.177>
- 荻野慎太郎, 大塚裕之 (2005) 北東部九州の洞穴堆積層産中期更新世松ヶ枝動物群に見出された *Macaca* 属 (*Macaca cf. fuscata*) 化石の形態学的研究. 霊長類研究 21 (1) :1-9. <https://doi.org/10.2354/psj.21.1>
- 鹿児島県 (2012) 鹿児島県史料 名越時敏史料二.

表 6-1 宮崎県の哺乳類

目名	科名	標準和名	学名		
霊長目(Primates)	オナガザル科	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>		
兔形目(Lagomorpha)	ウサギ科	ニホンノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>		
齧歯目(Rodentia)	リス科	ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i>		
		ニホンモモンガ	<i>Pteromys momonga</i>		
	ヤマネ科	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i>		
	キヌゲネズミ科	ハタネズミ	<i>Alexandromys montebelli</i>		
		スミスネズミ	<i>Craseomys smithii</i>		
		ヒメネズミ	<i>Apodemus argenteus</i>		
	ネズミ科	アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i>		
		カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i>		
		ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i>		
		ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i>		
真無盲腸目 (Eulipotyphla)	トガリネズミ科	ニホンジネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i>		
		カワネズミ	<i>Chimarrigale platycephalus</i>		
	モグラ科	コウベモグラ	<i>Mogera wogura</i>		
		ヒメヒミズ	<i>Dymecodon pilirostris</i>		
翼手目(Chiroptera)	キクガシラコウモリ科	コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i>		
		キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i>		
	オヒキコウモリ科	オヒキコウモリ	<i>Tadarida insignis</i>		
	ユビナガコウモリ科	ユビナガコウモリ	<i>Miniopterus fuliginosus</i>		
		ヒナコウモリ科	テングコウモリ	<i>Murina hilgendorfi</i>	
		コテングコウモリ	<i>Murina ussuriensis</i>		
		ノレンコウモリ	<i>Myotis bombinus</i>		
		モモジロコウモリ	<i>Myotis macrodactylus</i>		
		クロホオヒゲコウモリ	<i>Myotis pruinus</i>		
		アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i>		
		モリアブラコウモリ	<i>Pipistrellus endoi</i>		
		ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i>		
		食肉目(Carnivora)	イヌ科	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>
				アカギツネ	<i>Vulpes vulpes</i>
	イタチ科		ニホンテン	<i>Martes melampus</i>	
アナグマ			<i>Meles anakuma</i>		
ニホンイタチ			<i>Mustela itatsi</i>		
アライグマ科	シベリアイタチ		<i>Mustela sibirica</i>		
	アライグマ		<i>Procyon lotor</i>		
鯨偶蹄目 (Cetartiodactyla)	イノシシ科	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>		
	シカ科	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>		
	ウシ科	ニホンカモシカ	<i>Capricornis crispus</i>		

6-2. 絶滅種

宮崎県内でも絶滅した哺乳類が知られている。県内でのツキノワグマ (*Ursus thibetanus*) の情報は、1957年(昭和32年)に日之影町見立で発見された幼獣の死体が最後の記録である(野生動物保護管理事務所 1989)。一方、九州では1987年に大分県豊後大野市緒方町笠松山でツキノワグマが捕獲されたが、この個体の遺伝子を調べた結果、福井県から岐阜県にかけて分布しているクマの特徴を保持しており、この地域から持ち込まれたクマか、その子孫であることが判明している(大西・安河内 2010)。また、近年の研究では、高千穂町で保管されていた「熊の手」の遺伝子を解析した結果、絶滅したとされる九州個体群は他の国内集団とは遺伝的に分化した独自の地域集団を形成していた可能性が報告されている(西田ほか 2022)。

ニホンカワウソ (*Lutra nippon*) は、国内での最後の記録が1979年とされており、2012年に環境省が公表した第4次レッドリストでは「絶滅」と判断された。その後、2017年に対馬で野生のカワウソが撮影され、生息が確認されたが、遺伝子解析の結果、韓国に生息するユーラシアカワウソ (*Lutra lutra*) であることが判明している。県内での過去の記録は体系的に整理されていないが、西米良村で明治初期、五ヶ瀬川河口で昭和16年、えびの市川内川で昭和19年にそれぞれ目撃情報がある(岩本 2000)。また、1963年(昭和38年)に川内川で捕獲されたものが県内最後の記録と報告されている(上谷川 2020)。

九州では、長崎県の福江島、壱岐島、大分県の高島、熊本県の宇城市・宇土市などで確認されている（安田 2017）。宮崎県では、2001年に小林市でロードキル個体が1頭、2002年に小林市で3頭捕獲された記録があり（安田 2013）、近くに観光用の動物飼育施設があったため、そこからの逸出個体であった可能性が高い。

現在のところ、宮崎県では継続的な定着は確認されていないが、九州各地の事例からは、侵入が起きれば局地的に増え得る種である。したがって、再侵入の早期発見（樹皮剥ぎ痕、目撃・カメラ、ロードキル、捕獲）と、発見時の迅速な対応が重要である。

5-4. その他の外来種

(1) ハクビシン（県内では確実な記録がない）

ハクビシン (*Paguma larvata*) は東南アジア原産の外来起源とされる種である。九州においては福岡県、大分県、熊本県などで1990年代から2000年にかけてわずか3例の記録があるのみで（増田 2024）、近年の確実な記録はなく、現在は定着していない可能性が高いとされる。県内でも過去に本種を目撃したという情報はあがるが、写真や死体などの検証可能な確実な記録がなく、現在でもニホンアナグマ (*Meles anakuma*) と見誤る通報が寄せられることから、記録の扱いには注意が必要である。

(2) シベリアイタチ、ハツカネズミ、クマネズミ、ドブネズミ

シベリアイタチ (*Mustela sibirica*) は20世紀以降に朝鮮半島から人為的に導入された外来種で、県内では平野部を中心に広く分布している。ただし、長崎県対馬では在来種である。近縁種のニホンイタチ (*Mustela itatsi*) とは頭胴長に対する尾長の比（尾率）によって識別され、一般にニホンイタチの場合は50%以下、シベリアイタチの場合は50%以上が目安とされ、さらにシベリアイタチの方が体サイズが大きいことが知られている（Masuda & Yoshida 1994）。

ハツカネズミ (*Mus musculus*) は約4000年前に中国南部から、約2000年前に朝鮮半島から導入されたと推定されており、外来種と考えられている（Kuwayama et al. 2017）。クマネズミ (*Rattus rattus*) とドブネズミ (*Rattus norvegicus*) は、汎世界的に分布し、分類・遺伝系統の議論があるため外来・在来の整理には注意が必要であるが、在来種と主張する研究もある（Dinets & Asada 2020）。

これらの種は、古くから人為的移入や拡散の影響下にあるため、アライグマやクリハラリスのような侵入初期の封じ込めとは異なり、衛生害獣としての管理、在来生態系への影響、遺伝的系統（在来・外来）の議論等を考慮する必要がある。

6. 宮崎県の獣類（陸生哺乳類）

6-1. 宮崎県の哺乳類概観

宮崎県で現在確認されている陸生哺乳類は40種である（表6-1）。世界哺乳類標準和名目録（川田ほか 2018）を基に改訂された「世界哺乳類標準和名リスト2021年度版」に基づき整理すると、霊長目（サル類）が1種、兔形目（ノウサギ類）が1種、齧歯目（ネズミ類）が11種、真無盲腸目（旧食虫目の一部、モグラ類・トガリネズミ類）が5種、翼手目（コウモリ類）が12種、食肉目（タヌキ・イタチ類など）が7種、鯨偶蹄目（陸生ではシカ・イノシシなど）が3種となる。これらの種が標高1,000m以上の高山から低地の照葉樹林、里地里山、河川・湿地、海岸域、都市部など様々な環境に適応しながら生息している。

葉村における調査でモリアブラコウモリ (*Pipistrellus endoi*) の捕獲が報告された (船越ほか 2024a)。かつては九州での生息は知られていなかったが、熊本県 (船越ほか 2022)、福岡県 (船越ほか 2024b) について宮崎県からも発見された。コウモリは調査が難しい一方で、調査手法 (捕獲・音声記録・ねぐら探索) の組み合わせによって新たな生息情報が得られる可能性がある。今後は、周辺県での記録があることから、県内で未記録のヤマコウモリ (*Nyctalus aviator*) やニホンウサギコウモリ (*Plecotus sacrimontis*) の発見が期待される。宮崎県のコウモリ相については、今後も新しい発見が続くと見られる。生態系サービスをヒトが享受し続けるためには、コウモリの繁殖場所や休眠場所の保全が不可欠である。

5. 宮崎県の哺乳類の外来種

5-1. 宮崎県における外来哺乳類の位置づけ

宮崎県で確認されている哺乳類の外来種として注意すべき種がいくつか挙げられる。外来哺乳類は、農林業被害だけでなく、在来生態系への影響やヒトの生活環境への影響、さらには人獣共通感染症のリスクも懸念される。加えて、侵入初期には記録が少なく見逃されやすい一方、いったん定着・拡大すると根絶は難しくなるため、早期発見・早期対応が重要である。

5-2. アライグマ

北米原産のアライグマ (*Procyon lotor*) は、元々ペットとして飼われていた個体が逸出・遺棄されて野生化し、全国的に分布を拡大してきた外来哺乳類である。雑食性で環境への適応力が高く、河川や農地、集落周辺に出没する。水辺の両生類を食べることもあり (Ichioka & Hiji 2021)、農作物被害だけでなく生態系への被害も報告されている。

宮崎県内での初確認は、2011年 (平成23年) 4月に椎葉村の山林において自動撮影カメラで撮影された事例である。その後も確認事例は続き、県の記録では2025年末までにカメラ撮影・目撃・死体による確認が6件、誤って捕獲される例 (錯誤捕獲) による確認が12件となっている。市町村別では、延岡市5件、高千穂町4件、西都市、日之影町各2件、椎葉村、美郷町、高原町、綾町、小林市各1件である。九州北部には広く生息していることから、県北部への侵入は予想される一方、県中西部の西都市、綾町、高原町、小林市でも確認されており、県内各地で確認される可能性がある。

環境省九州地方環境事務所及び関係機関が公表した「九州中南部エリアアライグマ広域防除戦略」(2025)によると、高千穂町はすでに定着期、確認事例のあるその他の8市町村は侵入初期と位置づけられている。九州北部ではほぼ全域で生息確認が進んでおり、周辺県の繁殖状況を踏まえると、県内に広がっていくのは時間の問題である。宮崎県は侵入初期～定着初期の段階であり、分布拡大を抑えることが最重要課題である。目撃、カメラによる情報や捕獲情報を一体的に集約し、重点地域を定めて捕獲圧を高めることが現実的な対応となる。

5-3. クリハラリス

クリハラリス (*Callosciurus erythraeus*) は東南アジアに広く分布するリスで、日本では台湾の亜種を「タイワンリス」と呼ぶことが多い。適応力と繁殖力が強いいため、農林業や生態系に大きな被害を引き起こす。例えば、樹皮剥ぎによる林業被害や果樹被害などが知られており、被害が顕在化してからの封じ込めは容易ではない。

4-2. なんとなく悪いイメージ？実際は地域の農業と生態系に重要な貢献

コウモリは、家屋への侵入や糞尿による汚損（いわゆる糞害）などから「害獣」と見なされることがある。しかし、生態学的に見ると、多くの種は夜間に飛翔しながら大量の昆虫を捕食する昆虫食者であり、農地を含む人間活動の場においても重要な役割を担っている。実際、コウモリが提供する生態系サービス（害虫抑制、送粉、種子散布、栄養循環など）を世界中の研究から整理した研究（Ramírez-Fráncel et al. 2022）では、過去約 20 年の文献から 283 件の関連研究を抽出し、害虫（昆虫）の抑制、種子散布、送粉、グアノ（糞）の肥料利用などの貢献が整理され、コウモリの生態系サービスの重要性が示されている。

特に害虫抑制機能は、農業とのつながりが大きい。コウモリは夜行性の農業害虫を大量に捕食し、農薬コストの削減に貢献している可能性がある。Boyles らの研究（2011）はこの価値を試算し、米国全体で年間 37 億～530 億ドル（平均 229 億ドル）に達すると推定した。この結果は、コウモリの減少が農業経済に巨額の損失をもたらす可能性を示唆している。

また、より現場に即した研究もある。Ancillotto らの研究（2024）は、イタリアの有機リンゴ園での排除実験により、コウモリが主要害虫コドリंगा（*Cydia pomonella*）による被害（被害果の重量）を約 50% 低減することを示した。この捕食による品質維持の効果は、1ha あたり年 551 ユーロの経済的価値に相当すると推定している。本研究は、農薬を使用しない環境下でコウモリがもたらす具体的な利益を実証している。

都市のコウモリにも同様の側面がある。Aguiar らの研究（2021）は、ブラジルの都市に生息するコウモリが周辺環境で採餌し、83 種の節足動物（多くが害虫）を捕食していることを DNA 分析で示した。この害虫抑制効果はトウモロコシ畑で 1ha あたり 94 米ドルと試算され、都市のコウモリも農業経済に大きく貢献していることを示している。また、人工構造物（高架橋など）をねぐらとして利用するコウモリの研究でも、糞分析から鱗翅目・半翅目・双翅目などの昆虫が多く含まれ、農業害虫が含まれる可能性が指摘されている（船越ほか 2020）。

コウモリの生態系サービスは先に示した害虫抑制だけではなく、種子散布や送粉を通して作物や野生植物の繁殖に関わること、また洞窟などから採取されるグアノが窒素やリンに富む肥料として利用されてきたことも報告されている（Ramírez-Fráncel et al. 2022）。コウモリは生活の場ではトラブルの原因にもなり得る一方で、昆虫を減らす働きなどを通じて人間社会にも利益をもたらす存在と言える。

4-3. 宮崎県のコウモリ類の紹介

宮崎県は、沿岸部から山地まで多様な自然環境を有しており、多様なコウモリ類が生息している。県のレッドリスト（2020 年度版）に掲載されている哺乳類の中にも複数のコウモリが含まれ、クロホオヒゲコウモリ（*Myotis pruinus*）、オヒキコウモリ（*Tadarida insignis*）、ヒナコウモリ、ノレンコウモリ（*Myotis bombinus*）、テングコウモリ（*Murina hilgendorfi*）、コテングコウモリ（*Murina ussuriensis*）、モモジロコウモリ（*Myotis macrodactylus*）、ユビナガコウモリ（*Miniopterus fuliginosus*）などが挙げられている（宮崎県 2020）。また、県内ではこれらの他に、キクガシラコウモリ（*Rhinolophus ferrumequinum*）、コキクガシラコウモリ（*Rhinolophus cornutus*）、アブラコウモリの生息も確認されている。

また、宮崎県は、国内のコウモリ研究史の中でも重要な地点を含む。オヒキコウモリは、かつては迷行個体が散発的に見つかる程度と考えられていたが、1996 年に宮崎県門川町の枇榔島で繁殖集団が見つかった（船越ほか 1999）。近年も新知見が続いている。2024 年には、椎

では、どのようにしてその存在を確認すればいいのであろうか。コウモリ類は直接的な種判別が難しい分類群であるが、その生態は「超音波によるエコーロケーション（反響定位）」に強く支えられている。近年は、超音波録音装置（自動録音機）や解析ソフトの普及により、野外で記録した超音波の鳴き声（エコーロケーションコール）をスペクトログラムで表し、周波数や音声構造から種（あるいは種群）を推定する方法が確立されてきた。海外では音声による種判別技術が進んでいるが、国内でも超音波音声による種判別に関する研究（船越 2010）や、超音波自動録音装置と音声による種判別法を組み合わせ、環境利用（採餌場所の違い等）を評価しようとする研究（福井ほか 2004）などが進められている。参考までにアブラコウモリとヒナコウモリの超音波音声のスペクトログラムを示す（図 4-1）。最大音圧周波数、終端部周波数、コール長などの複数の音声特徴量から種を推定することができる（船越 2010）が、コウモリの音声には探索コール、接近コール、バズコール（採餌音）、コミュニケーションコールなど複数の種類があり未解明な部分も多い。音声解析に基づく分布・活動調査は、とくに観察が難しい森林性・希少種の検出力を高める手法として期待されている（小柳ほか 2021）。

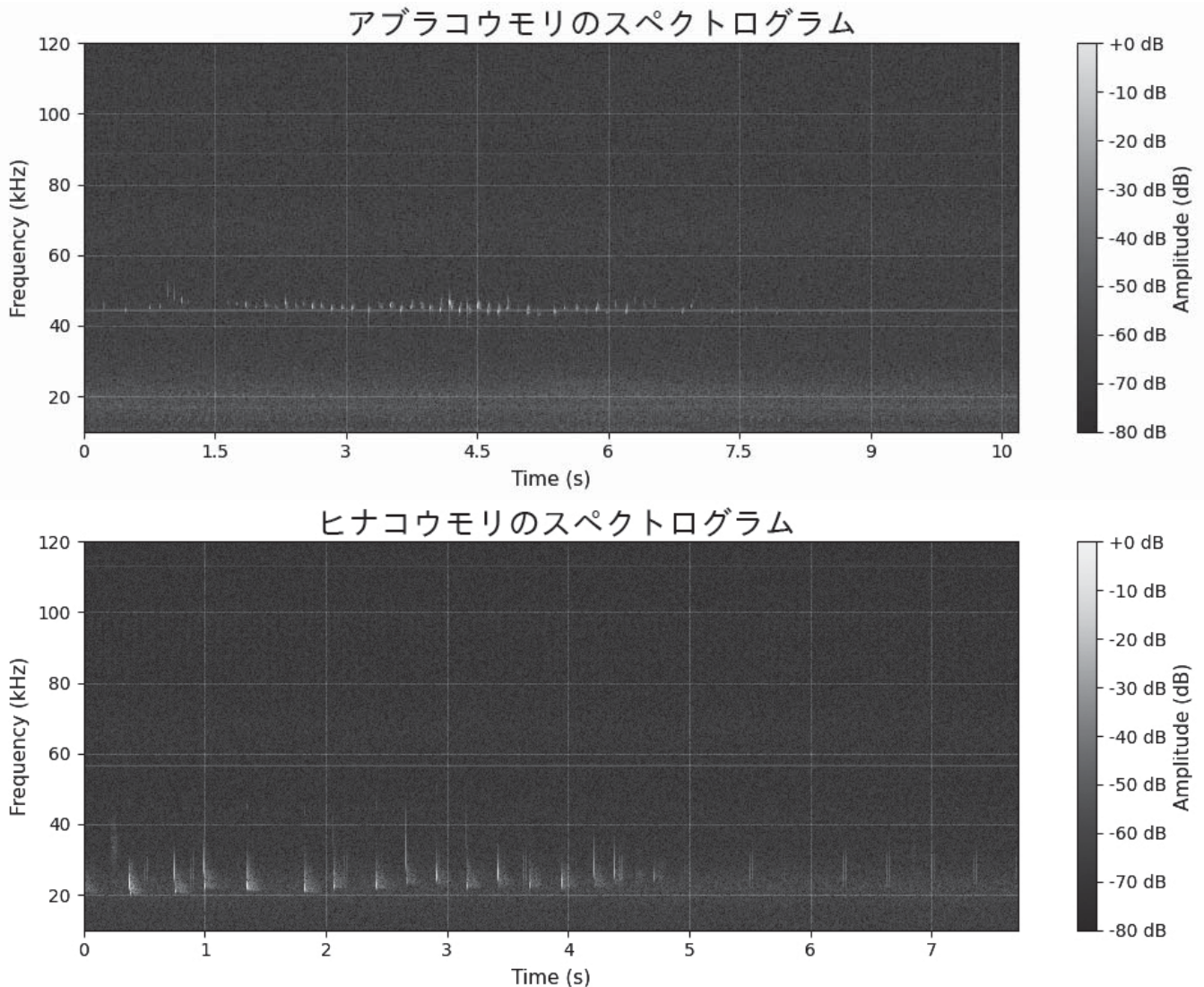


図 4-1 アブラコウモリ（上）とヒナコウモリ（下）のスペクトログラム。アブラコウモリは 45kHz 周辺の周波数、ヒナコウモリは 20-25kHz の周波数を発している。

この状況を受け、宮崎県は狩猟・有害鳥獣捕獲に加えて、指定管理鳥獣捕獲等事業による集中的な捕獲を組み合わせることで捕獲強度を高める方針を明確にしている。実際、2024年度に実施した同事業では、ニホンジカの捕獲目標 305 頭に対し、実績 323 頭（達成率 106%）が報告されている。すなわち、県全体では年間数万頭規模の捕獲を継続しつつ、重点区域では事業による捕獲を実施する二層構造で運用されている。

(3) 九州の事例

九州全域の糞粒法データ（1995-2019年）を解析した研究（Suzuki et al. 2022a）では、捕獲数が増加しても島・県レベルでは密度指標が低下しにくく、高止まりまたは安定する傾向が示されている。また、減少が明確に見えにくい背景として、管理計画策定時の初期推定の不確実性（過小推定の可能性）も指摘されている。さらに、九州の実証例として、熊本県を 5km × 5km の 184 エリアに分割し、2009～2017年の捕獲数・密度・林業被害を解析した研究（Suzuki et al. 2022b）では、捕獲数が多いエリアほど密度が減少し、それに伴って林業被害が減少していた一方、捕獲が少ないエリアでは密度と被害が増加し、県全体では被害の明確な減少が見えにくいことが示された。すなわち捕獲の効果が及ぶ地理的範囲には限界があり、都道府県という大きな単位での評価だけでは、捕獲の効果が及んでいる場所と及んでいない場所が相殺されてしまう。なお、同研究では9年間の累計捕獲数が1,000頭程度となるあたりから被害が減少し始める傾向が示されているが、この値は元の個体数や環境条件に依存するため、宮崎県内のデータでの検証が必要であろう。

(4) 宮崎県内で進めるべき方向

以上を踏まえると、宮崎県内で進めるべき方向は次のように整理できる。

- ① 県全体で捕獲を分散させるのではなく、被害が大きい地域や高密度域、侵入前線などの重点地域に捕獲努力を集中させる。
- ② 個体数削減の成否を左右するメスの捕獲割合を高めるための仕組み（例として捕獲報酬の設計見直し等）を導入する。
- ③ 県全体の捕獲頭数だけで評価せず、密度指標、被害、植生回復、捕獲構成（メス比率）をセットで追跡し、結果に応じて計画を更新する順応的管理を徹底する。

4. 宮崎県のコウモリ類

4-1. 最も身近な哺乳類のコウモリ

2025年は大型哺乳類の出没が話題になる一方で、日頃から私たちの生活圏の身近にいる哺乳類は何であろうか。それは、コウモリの仲間のアブラコウモリ（*Pipistrellus abramus*、いわゆる「イエコウモリ」）である。民家の雨戸の戸袋でコロニーを作ることがあり、換気扇の開口部に入って休んでいることもある。夕暮れ時に住宅地の上空をヒラヒラと小型の黒い影が飛び交う光景を見ることがある。これも実は昆虫を追って採餌するアブラコウモリである。その他に、2025年に宮崎市内の鉄道高架橋でヒナコウモリ（*Vespertilio sinensis*）の繁殖集団が確認された（金川・岩切 2025）。コウモリは夜行性であり肉眼での観察が難しいため、その存在を認識することは容易ではないが、実はわれわれのすぐ身近に生息している哺乳類なのである。

こすり含む)による枯死・材質劣化が深刻である。農業被害では、水稲、果樹、飼料作物、野菜類など多岐にわたり、食害や踏み荒らしによる被害が発生している。

次に生態系への影響については、シカが高密度化した森林では、林床植物が徹底的に食べ尽くされ、地表が露出してしまい、土壌流出や山地荒廃のリスクが高まっている。また、希少植物が食害により消失し、不嗜好植物ばかりが残ることで、植生が単純化し、森林生態系のバランスが崩れている。宮崎県の高山帯においてもニホンジカの影響が大きく、林床を覆っていたササ類は枯死・消滅し、直接的な食害によりタシロテンナンショウ、ジンバイソウ、キレンゲショウマなどが減少し、樹林の倒壊などによる生育環境の悪化によりヨウラクランやツリシュスランなどの着生植物が消失している(井上 2025)。また、餌資源の枯渇や生息域の競合により、ニホンカモシカの生存をも脅かしている(岩本 2025)。

3-6. 抜本的な対策としての捕獲

(1) 全国的な状況

ニホンジカは、全国的に生息域が拡大し、農林水産業や生態系、生活環境に深刻な影響を及ぼす状況が続いている。そのため、対策の中心は被害防除だけでなく、個体数を適正水準へ誘導する管理(捕獲)へ移行している。

環境省の推定では、本州以南のニホンジカの個体数は 2022 年度末時点で中央値 246 万頭(90% 信用区間: 約 216-305 万頭)であり、依然として高い水準にあるとされている。こうした状況を踏まえ、国は抜本的な鳥獣捕獲強化対策を背景に 10 年後までに個体数を半減するという目標を掲げて捕獲強化を進めてきた。

また、鳥獣保護管理法では「管理」が制度上明確に位置づけられ、鳥獣の生息数を適正な水準に減少させる観点からの取組が法目的として整理されている。一方で、捕獲数の増加が必ずしも密度指標低下に直結しない可能性も指摘されており、目標設定・捕獲の重点化・モニタリングと計画修正を一体的に運用する重要性が増している。

(2) 宮崎県内の状況

宮崎県ではニホンジカが南那珂地域を除いてほぼ全域に生息し、2023 年度末の推定生息数は約 88,000 頭とされている。さらに県の管理計画(2022)が掲げる目標密度(保護優先地域 5 頭/km²、その他 2 頭/km²)に対し、2023 年度末時点で広範囲に推定生息密度が 10 頭/km²を超える状況が示されており、捕獲強化が必要である。加えて、2023 年度の農林作物等被害額は約 1 億 3,700 万円で、野生鳥獣被害額全体の約 40% を占めており、被害面でも深刻さが継続している。

捕獲頭数の推移を見ると、宮崎県では制度・運用の変更に合わせて捕獲規模が段階的に拡大してきた。県計画によれば、メスジカの狩猟解禁後(1996 年度)に捕獲頭数は 5,000 頭超となり、2002 年度までは 5,000 ~ 6,000 頭で推移したが、可猟区拡大や狩猟期間延長後(2003 年以降)は、8,000 ~ 9,000 頭に増加した。さらに 2009 年度には、特別捕獲で 12,500 頭を捕獲し、年度合計で 20,176 頭に達した。その後も捕獲強化が進み、2014 年度以降は有害捕獲が年間約 18,000 ~ 22,000 頭で推移し、2020 年度の総捕獲頭数は 26,891 頭になったと整理されている。捕獲は量的には大規模化しているにもかかわらず、推定密度が高い地域が残存している点が課題であり、全体の捕獲頭数だけでなく、重点地域への集中や捕獲構成(性・齢)を含めた捕獲設計が不可欠である。

被害の拡大を受け、法律そのものが改正され、科学的データに基づく計画的な「個体数調整」を行う仕組みが整備された。

- ◆ 1999年（平成11年）：鳥獣保護法が改正され、「特定鳥獣保護管理計画制度」が創設された。都道府県が科学的根拠に基づく計画（特定計画）を策定することで、メスジカの捕獲や夜間銃猟などの規制緩和が可能となった。
- ◆ 2007年（平成19年）：狩猟獣としての「オスジカ」「メスジカ」の区分が「シカ」に統合され、環境大臣によるメスジカ捕獲禁止措置が廃止された。これにより、特定計画を作成していない地域でもメスジカの狩猟が可能となった。

1999年の法改正により創設された「特定鳥獣保護管理計画制度」により、都道府県が計画を策定し、モニタリング等に基づく計画的・科学的管理（フィードバック管理）を進める枠組みが整備された。

(3) 捕獲強化と個体数削減の時代（平成後期～現在）

2013年には、環境省・農林水産省が「抜本的な鳥獣捕獲強化対策」を示し、ニホンジカとイノシシについて、当面の目標として10年後までに個体数を半減させる方針を掲げた。また、2014年の法改正では、法律の題名・目的に「管理」が明確に位置づけられ、あわせて国の関与を強める仕組みとして「指定管理鳥獣捕獲等事業」が制度化された。この結果、従来の都道府県中心の管理に加え、広域・集中的な捕獲を進めるための制度的支援（計画策定、規制緩和、交付金等）が組み合わされ、捕獲圧を高める方向へ政策が加速した。

3-4. ニホンジカはなぜ増えたのか

ニホンジカが増加した要因は複合的と考えられるが、主に以下の点が挙げられる。

- ◆ 保護政策の成功と狩猟圧の低下：戦後の保護政策により個体数が回復した一方、狩猟者の減少・高齢化により捕獲圧が低下した。これは保護政策が成功したと言える。
- ◆ 生息環境の好転：拡大造林や伐採により、餌場となる草地や若い造林地が増加した。伐採については大面積皆伐でも小面積皆伐でも同様に餌場創出につながった。また、薪炭林の利用低下により里山が放置され、ニホンジカにとって好適な隠れ場所や餌場が増えた。
- ◆ 繁殖能力の向上：栄養状態が良くなったことで、集団レベルで初産年齢が低下し繁殖率が増加した。
- ◆ ニホンジカの場合、食べ物がある限り増加傾向が続き、山林が続く限り密度効果が働きにくい傾向がある。「増加→分布拡大→増加→分布拡大→」が続いた。

加えて、近年の研究では、耕作放棄地の拡大に加えて積雪条件などの気候要因が分布拡大に関与していることが示されており（Ohashi et al. 2016）、増加要因は地域の環境変化とも結びつけて整理する必要がある。

3-5. ニホンジカが増えてどうなったのか

近年のニホンジカの増加が引き起こす被害は、農林業だけでなく生態系への影響が大きいことが他の鳥獣害との大きな違いである。

まず農林業被害について見ると、宮崎県における農作物被害額は、2012年度に約3億7,000万円とピークに達し、その後減少傾向にあるものの、依然として高い水準で推移している。林業被害では、人工林の被害が全体の約4割を占めており、植栽木の枝葉食害や、樹皮剥ぎ（角

- ・大分県・宮崎県エリア（祖母・傾・大崩山系周辺）
- ・熊本県・宮崎県・鹿児島県境エリア（霧島山系・九州山地南部周辺）

これらの高密度地域は、県境をまたいで位置しており、ニホンジカが行政区分を越えて移動している実態を示唆している。また同研究では、2014年から2015年にかけて急激に生息密度が上昇し、その後も高い水準で推移したことが報告されている。ただし、この推定は信頼区間（不確実性の幅）が大きく、2014年以前の推定精度がそれ以降よりも低かった可能性も指摘されている。

近年の国内4地域（北海道、静岡、岐阜、宮崎）を対象としたマイクロサテライト（SSR）解析では、椎葉村内の約1.5 km²の範囲で得られた個体を含むデータが用いられた（島村ほか2020）。STRUCTURE解析の結果、宮崎県の集団は北海道や中部（静岡・岐阜）の集団とは明瞭に異なる、独立したクラスターとして検出され、これは地理的な距離や障壁を反映した結果とされている（島村ほか2020）。また、日本国内のニホンジカは全体として遺伝的多様性が低い傾向があり、過去の個体数減少（ボトルネック）を反映している可能性が指摘されている（島村ほか2020）。

3-3. 全国的な捕獲制度の流れ

ニホンジカの捕獲制度は、(1) 個体数の激減を背景とした「保護政策」、(2) 回復・被害の顕在化を受けた「管理への転換」、(3) 国主導も含む「捕獲強化・個体数削減」という流れで変化してきた（環境省2016b, 常田2016, 荒木ほか2020）。

(1) 保護政策の時代（明治～昭和中期）

明治以降、乱獲や生息地の開発によりニホンジカの個体数は減少し、地域的な絶滅も起きていた。そのため、狩猟獣としての利用と並行して、若齢個体やメスの保護措置が取られ始めた。

- ◆ 1892年（明治25年）：「狩猟規則」が制定され、1歳以下のニホンジカの捕獲を禁止
- ◆ 1918年（大正7年）：「狩猟法」改正により狩猟獣に指定されたが、その後も保護的な措置が続いた。
- ◆ 1925-1926年（大正14-15年）：メスジカが狩猟獣から除外され、捕獲が禁止された。
戦中戦後の混乱期による乱獲で個体数が激減したため、国は強力な保護政策を推進した。
- ◆ 1948年（昭和23年）：「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」に改正。メスジカが再び狩猟獣から除外され、全国的に捕獲禁止となった。
- ◆ 1950年（昭和25年）：オスジカのみが狩猟獣とされた。
- ◆ 1978年（昭和53年）：環境庁（当時）はオスジカの捕獲数を「1人1日1頭」に制限し、保護を強化した。

これらの保護政策に加え、戦後の拡大造林等による生息環境の変化も重なり、1970年代前後から個体数が回復・増加に転じたと整理される。

(2) 管理への転換期

個体数の回復に伴って農林業被害が深刻化したため、保護一辺倒の政策が見直され、条件付きでの捕獲緩和が始まった。

- ◆ 1994年（平成6年）：環境庁（当時）告示により、一定の計画（保護管理計画）を策定した都道府県に限り、メスジカの狩猟が許可された（メスジカ狩猟獣化）。
- ◆ 1996年（平成8年）：宮崎県でもメスジカが再び可猟となった。

(4) 追い払い

かつて中山間地や農村部ではイヌの放し飼いが行われ、集落での鳥獣害を抑える役割を果たしていた。現在は放し飼いのイヌはほとんど見られず、ニホンザルにとって集落周辺が天敵のいない環境となっている。そのため、集落にニホンザルを近づけないためには、ヒトによる追い払いが重要となる。集落近くで単発的に追い払うだけではなく、集落近くの林の中までしつこく追い払い、「集落に行くことは怖いことだ」と学習させることが重要である。

3. 宮崎県のニホンジカ

3-1. ニホンジカはどんな動物か

ニホンジカ (*Cervus nippon*) は、環境適応力が高く、繁殖力が強い草食動物である。オスには角があり毎年生え変わる。オスの角は年齢とともに大きくなり、4歳で4尖となる。オスとメスは通常、別々の群れを作って生活し、メスは母系的な群れを作り、定住性が高い傾向にある。一方、オスは1～2歳で母親のもとを離れ、単独またはオス同士の群れを作る。秋の交尾期(9月下旬～11月)になると、強いオスは縄張りを形成し、ハーレムを作る。オスジカの遠吠えのような鳴き声を聞くのはこの頃である。出産期は5月下旬～7月上旬頃で、妊娠期間は約230日、通常1子を出産する。栄養状態がいい環境では、2歳から出産が可能となり、これが個体数の急速な増加につながる要因となっている。

食性は極めて広く、1,000種以上の植物を食べることが記録されている(森林研究・整備機構2003)。アセビやマツカゼソウなどの不嗜好植物を除き、ほとんどの植物を食べ尽くしてしまうため、森林生態系への影響は甚大である。ニホンジカの採食圧が高い状態では、下層植生の衰退、樹木実生の更新阻害、植生単純化などが全国各地から報告されている(Takatsuki 2009)。

3-2. 宮崎県内での分布

県の第二種特定鳥獣(ニホンジカ)管理計画(2022b)によると、2020年度(令和2年度)調査において県平均17頭/km²の生息密度が報告されており、九州内でもニホンジカの生息密度が非常に高い地域の一つである(Suzuki et al. 2022a)。古くは江戸時代の「三國名勝圖會」(五代・橋口1843〔山本1905刊])に、日向国の吉田、馬関田、加久藤、飯野、小林、須木、野尻、綾、高岡、穆佐、高原、高城、山之口、都城などで「鹿」の生息が記述されている。また、環境庁(当時)が実施した1978年の自然環境保全基礎調査では、県南部の南那珂地域は「絶滅」とされていたことから、以前に生息していたことが推察される。県により継続的に調査が実施され生息状況が調べられているが、1978年、2003年、2018年の分布図を比較すると、生息域が確実に広がっていることが確認される。かつては山間部が主な生息域であったが、現在は集落周辺の里山、さらに平野部にも出没するようになり、1978年に絶滅と報告された南那珂地域を除いて、ほぼ全域が生息域となっている。その南那珂地域においても、青井岳周辺や鹿児島県志布志市方面から侵入してきていると思われるニホンジカの確認情報が増加しつつある。

九州全域を対象とした最新の研究(Suzuki et al. 2022a)によると、1995年から2019年までの九州各県の糞粒法調査データを解析した結果、九州には4つの高密度コア地域が存在し、そのうち以下の2つが宮崎県に関連している。

物に依存する群れと依存しない群れでは、初産年齢、出産間隔、当歳死亡率に差があると考えられており、増加率の差が数年後の群れの規模に大きく影響しうる。すなわち、農作物という高栄養・高効率のエサを手に入れることができる群れほど増加ポテンシャルが高まり、被害が固定化・慢性化しやすい構造が生まれ得る。

餌付けが行われていた幸島や大分県の高崎山などでは、栄養状態の改善により出産率が上昇し、個体数が急増した歴史がある。高崎山では1979年に個体数が約2,000頭に達し、過密状態になった群れは周辺の植生への過度な採食圧を生み、樹皮剥ぎによる立ち枯れや林床植物の消失など森林荒廃を招いた（横田・長岡1998）。これは「餌付け」という人為的な介入が、野生動物の個体群動態のみならず生態系にいかにより大きな影響を与えるかを示す事例である。

2-4. 被害対策をどうすすめるか

野生鳥獣の被害対策は、(1)被害防除（ヒトの管理）、(2)個体数管理（動物の管理）、(3)生息地管理（環境の管理）の3本柱を並行して進めることが基本である。加えて、ニホンザルでは(4)追い払いも重要である。環境省「ニホンザル特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル（種別編）」（2016a）でも、計画的・科学的管理の枠組みとして、被害防除・個体数管理・生息環境管理と統合的に進める方向性が示されている。以下、宮崎県の現場に即して要点を整理する。

(1) 被害防除

対象動物に応じて効果的な柵を設置し、適切な管理を行えば、囲った中の作物は守ることができる。ニホンザルは手先が器用で登攀能力も高いため、防護柵だけで守る場合は電気と柵（ネット）の組み合わせが有効である。小さな菜園では全体を囲う方法が効果的である。電気を使用する場合は、電圧低下や草の接触による漏電などが起きないように、継続的なメンテナンスが不可欠である。

(2) 個体数管理

農作物への依存度が高まり、人間を恐れなくなった群れに対しては、計画的な捕獲による群れ管理が必要である。県内でも1990年代以降捕獲頭数は増加傾向にあり、2012年をピークに、近年も年800頭前後が捕獲されている。県の第二種特定鳥獣（ニホンザル）管理計画（2022a）では、ニホンザルとヒトの軋轢を前提に、生息・捕獲・被害状況を把握しつつ、地域個体群の存続と被害低減の両立を目指している。個体数管理はそのための一手段であり、被害防除と生息地管理を組み合わせることで効果が持続する。

(3) 生息地管理

鳥獣害対策では、集落で野生動物にエサを提供しないことが最も重要である。農作物残渣や放棄果樹が、集落で無意識の餌付けとなっている例は多い。いわゆる「集落で食べても誰も怒らないエサ」である。この状況を放置すると、群れの遊動域が集落側に固定化し、繁殖率の増加と被害の慢性化の悪循環に陥ってしまう。ニホンザルにとって魅力のない集落を作ることが、無意識の餌付けを防ぐことにつながる。

ンザル分布調査を継続して実施した。1974年には19群れ(810-910頭)、1989年には30群れ(950-1,150頭)、1997年には55群れ(1,734-2,096頭)と報告し、増加傾向が示されている。2004年から2006年には宮崎県が電波発信機を装着して74群れの分布状況を調べた。2008年以降は目撃や聞き取りによる調査を継続して実施し、2018-2021年の調査結果では約99群れ3,000-4,000頭が生息すると推定されている。遺伝的な特徴について、Kawamoto et al. (2007)で全国規模の遺伝的解析を実施した研究者によれば、宮崎県の個体群は他県と異なり「mtDNAがモザイク状に分布する傾向」があり、その原因は不明だが個々の群れが定着した経緯が単純ではない可能性や、人為的攪乱の影響の可能性が示唆されている。この点は、地域個体群の成立過程や移動の歴史を考える上で、今後の検討課題として位置づけられる。

【分布拡大の背景】

かつてニホンザルは、人間活動による狩猟圧や生息地攪乱により、奥山へと追いやられていた可能性がある。戦後の農水省・岸田久吉の調査で10-20頭という少数の報告が多かったことは、この時期が歴史的に分布域や個体数を減少させていた時期であることを示唆している。しかし、1960年代から1970年代にかけての燃料革命により薪炭林の利用が激減し、里山が放置され自然林へと遷移したこと、さらに狩猟圧が低下したことなどの人間活動の変化が、ニホンザルにとって利用可能な生息環境を拡大させたと考えられる。その結果、奥山から里山へ、里山から人里へと分布を広げることとなった。

2-3. ニホンザルによる県内の被害の状況

1970年の竹下完によるアンケート調査の段階で、すでにニホンザルが生息する全国の市町村の約半数で農作物被害が報告されており、この時期が現代に続く獣害増加の転換点であったと考えられている。

宮崎県内の農作物被害額の推移としては、2012年度(平成24年度)に約8,700万円を超えたが、2020年度(令和2年度)は約5,600万円となっており(宮崎県2022)、金額ベースではやや減少傾向にある。しかし、ニホンザル被害は、嗜好する食べ物がヒトの食べ物と大きく重なるため、多くの農作物が被害対象となる。被害は単に「食べられる量」の問題に留まらず、食い散らかしや踏み荒らしによる視覚的・精神的ダメージ(「何をつくってもやられる」というあきらめ)が大きいのが特徴である。また、集落の屋根に上がったり威嚇したりすることで、生活環境そのものを脅かす存在となっている。集落被害の深刻度(レベル4や5)が高い地域は、H25-27年度とH30-R3年度の比較で72から51へ減少した一方、被害が起きている集落数自体は444から465へ増加している。すなわち、深刻度の高い地域は減っているものの、影響範囲は広がっている状況が示唆されている。

被害の季節性は、一言で言えば「旬なものを食べ歩く」行動である。県内での被害例として、トウモロコシ、クリ、ダイコン、日向夏、タケノコ、サツマイモ、菜園の野菜などが挙げられ、遊動域の山の状況や農作物の栽培状況によって、出没する頻度や時期は変動する。

さらに、農作物への依存が強まると、群れの生活史そのものが変化する可能性がある。農作物と農作物残渣は、ニホンザルの視点では同じエサであるが、ヒトの視点では農作物は被害であり、農作物残渣は被害として認識されない。こうした農作物残渣が野生動物のエサになっている例は多く、「無意識の餌付け」と呼ばれる。無意識の餌付けが続く集落では、栄養状態の改善を通じて群れ個体が増加し、農作物依存がさらに強まる悪循環を生む可能性がある。農作

は 217 遺跡であり、その大部分（180 以上）は縄文時代の貝塚であった（渡邊・三谷 2019）。また、縄文時代の出土獣骨（全 4,666 個体）の割合を見ると、ニホンジカ（39.3%）とイノシシ（37.7%）が大部分を占め、ニホンザルはわずか 2.2% に過ぎない（渡邊・三谷 2019）。これらのことは、少なくとも出土記録の上では、ニホンザルが人間社会から離れた奥山に生息しており、狩猟対象としてもシカやイノシシに比べて稀な存在だったことを示唆している（渡邊・三谷 2019）。

宮崎県では都城市の尾平野洞窟遺跡で焼いた痕跡のあるニホンザルの骨が見つまっている。また、近世においては、薩摩藩が 1843 年に編纂した「三國名勝圖會」（五代・橋口 1843〔山本 1905 刊〕）に、日向国の吉田、加久藤、飯野、小林、綾、穆佐、高原、高城、山之口では「猿」の生息が記述されている。

【近代以降の分布把握（宮崎県の記録）】

宮崎県内の近代の生息状況については、いくつかの貴重な調査記録が残されている。

(1) 1923 年（大正 12 年）長谷部言人によるアンケート調査

東北大学の長谷部言人によって郡、支庁、島に対するアンケート調査が実施された。ニホンザルの形態を調べるための材料収集の一手続きとして行われたと考えられている（渡邊ほか 2023）。県内では、現在の高千穂町、日之影町、延岡市、門川町、日向市、美郷町、椎葉村、西米良村、西都市、都農町、木城町、小林市、高原町、都城市、串間市などで生息ありとの回答があった。「多い」と回答があった場所として、椎葉村弓木山、東郷村手田山・大内山・冠岳、南方村行藤山、東海村桧山、北川村大崩山、北川村戸亀山、北川村田原山、須木村柚園国有林などが挙げられている。

(2) 1953 年（昭和 28 年）岸田久吉による調査

1950 年に農水省が全国の営林局と都道府県に照会して調査を実施し、1953 年に岸田久吉がまとめた。逼迫していた実験用霊長類需要への対応を背景とした調査であったとされる（渡邊ほか 2023）。県内では約 21 箇所の生息域が記載され、群れ規模はいずれも 10～20 頭と整理されている。

(3) 1961-62 年（昭和 36-37 年）、1970 年（昭和 45 年）竹下完による詳細なアンケート調査

当時、日本モンキーセンターの職員であった竹下完が 2 回の調査を実施した。1961-1962 年の調査結果は、「野生ニホンザルの分布及びポピュレーション（上）－アンケート調査による」（野猿 19 号）と「野生ニホンザルの分布及びポピュレーション（下）－アンケート調査による」（野猿 20・21 合併号）に発表された。一方、1970 年のアンケートは、対象を拡大して大規模に実施されたが、結果は当時公表されず、2023 年に資料として公開された（渡邊ほか 2023）。1970 年調査では 1102 市町村宛にアンケートが送付され（全国の 3 分の 1 が調査の対象）、回答のない市町村には再送するなど徹底した運用が行われ、940 の市町村（85%）から回答を得た。全国では 760 群 43,933 頭の生息が報告されている（渡邊ほか 2023）。宮崎県内からは、当時の串間市、西米良村、南郷村、諸塚村、五ヶ瀬町、北方村、北川村、西都市、高岡町、北浦村から生息情報が寄せられている（渡邊ほか 2023）。

【近年の分布と遺伝的特徴】

竹下完は、フェニックス自然動物園の開園に合わせて宮崎へ移り住み、その後も県内のニホ

状、そして獣害に対する具体的な対策について詳述する。また、単に害獣としての側面だけでなく、生態系における役割や、最新の研究によって明らかになった遺伝的な特徴についても触れる。客観的な事実と科学的根拠に基づいて現状を整理し、宮崎県のヒトと野生動物が持続的に共存できる道筋を考えたい。

2. 宮崎県のニホンザル

2-1. ニホンザルはどんな動物か

ニホンザル (*Macaca fuscata*) は日本固有の哺乳類であり、ヒトを除く霊長類の中で最も北に生息する種として知られる。基本的に、エサを求めて遊動域内を群れで移動し、昼間に活動する動物である。群れは複数のオトナオスとオトナメスに加え、3～4歳程度のワカモノ、1～2歳程度のコドモ、0～1歳のアカンボウなど、複数の年齢段階の個体から構成され、メスを中心とした社会が形成されている。すなわち、メスは生涯にわたって生まれた群れに留まる傾向がある一方、オスは性成熟に伴い生まれた群れを離れて他群に移出する傾向を持つため、群れ全体として母系的な社会構造になる。このような社会構造は、群れ内の血縁関係や順位構造、さらには行動の伝搬様式にも関わっている。

繁殖には明確な季節性があり、交尾期は秋～冬、出産は春～夏に集中し、妊娠期間は約6ヶ月である。初産年齢は栄養状態等のエサの状況によって変化するが、おおよそ5歳頃と報告されている(相見・高畑 1994)。食性は基本的には果実食であるが、葉、花、キノコ、昆虫、卵なども採食する。この幅の広い食性が森での生活を支える一方で、人里の多様な作物にも手を伸ばしやすい背景ともなる。

宮崎県のニホンザルを語る時、串間市の幸島は外せない。幸島のニホンザルは世界的にも有名であり、国の天然記念物(「幸島サル生息地」)に指定されている。1952年に日本で初めて餌付けに成功し、個体識別に基づく観察が可能になったことで、日本の霊長類学の飛躍的な発展に貢献した。餌付けによって社会行動や順位関係の理解が進み、さらに「イモ洗い」などの新しい行動が若年個体から始まり、それが遊び仲間や血縁関係にある個体へと水平伝搬し、やがて母親から子へと垂直的に伝承されていく過程が詳細に記録されている(杉山ほか 2013)。

ミトコンドリア DNA (mtDNA) を用いた系統地理学的研究によると、日本列島のニホンザルは遺伝的に東日本グループと西日本グループに大別される。宮崎県を含む九州の個体群は西日本グループ(ハプログループ B)に属し、さらにその中でも九州独自の遺伝的特徴(サブグループ B3 など)を持つことが分かっている(Kawamoto et al. 2007)。

2-2. ニホンザルの歴史と宮崎県内での分布

【起源と古い記録】

ニホンザルの祖先は、約43万年前(中期更新世)に大陸から日本列島へ渡来したと考えられている(荻野・大塚 2005)。氷期サイクルの中で生息地の縮小と孤立を繰り返しながら後氷期に分布を拡げたと推測される。九州北東部(北九州市)の松ヶ枝動物群からは、中期更新世に位置づけられるニホンザル化石(*Macaca cf. fuscata*)が発見されており、当時のニホンザルは現生種よりも大型の歯を持っていたことが分かっている(荻野・大塚 2005)。

旧石器時代から江戸時代までの5,700余りの遺跡のうち、ニホンザルの骨が発見されたの

1. はじめに

1-1. 宮崎県の自然環境と生物多様性

宮崎県は九州南東部に位置し、南北に長く、太平洋に面した温暖な海岸部から九州山地を含む冷涼な山岳部まで、変化に富んだ地形を有している。高温多雨な太平洋側気候に属し、冬季は九州山地が西からの季節風を遮断し、晴天かつ乾燥した日々が続くことも特徴である。沿岸部の照葉樹林帯から、標高 1,700m を超える霧島連山や祖母・傾・大崩山系のブナ帯に至るまで、多様な植生が連続的あるいはモザイク状に分布している。この垂直的な多様性は野生動物にとっても重要な意味を持ち、低地の照葉樹林から高地の落葉広葉樹林まで続く森林は豊かな果実や堅果類が多様な餌資源を提供し、生息場所としても機能することで、多くの哺乳類の生活を支えている。本県にはニホンザルやニホンジカといった中大型哺乳類から、森林性のコウモリや齧歯類に至るまで、多種多様な種が生息しており、その生物相の豊かさは国内でも有数である。これらの野生動物は、種子散布や送粉、害虫抑制などを通じて生態系サービスの一翼を担っており、宮崎県の豊かな自然環境そのものを形作ってきた重要な構成員といえる。

1-2. 変容するヒトと動物との関係

かつて、ヒトと野生動物の間には、暗黙の境界が存在していた。集落周辺の里山は、薪炭林や草地としてヒトが頻繁に利用・管理し、集落周辺ではイヌが放し飼いされ、野生動物が容易に近づけない緩衝地帯（バッファゾーン）として機能していた。そして、ヒトの営みは里山から奥山まで広がっていた時期もあり、そのような時期には、野生動物がさらなる奥地へと追いやられていたと考えられる。また、江戸時代の薩摩藩書物「三國名勝圖會」（五代・橋口 1843〔山本 1905 刊〕）での獣類などの記述は、当時の人々が野生動物の存在を認識し、地方の産物として利用していたことを示唆している。しかし、1950 年代以降のエネルギー革命や高度経済成長に伴い、この関係は劇的に変化した。薪炭需要の低下により里山は放置され、野生動物の隠れ場所へと変化していった。さらに、中山間地における過疎化・高齢化や耕作放棄地の拡大は、ヒトと動物の境界を一層曖昧なものにした。かつての奥山の動物であったニホンザルやニホンジカは、集落周辺の栄養価の高い餌の味を覚え、農林業被害や生活環境被害といった深刻な軋轢を生むようになった。現代のヒトと野生動物の関係を考えることは、崩れてしまったこの境界線を、現在の社会情勢に合わせて、どのように再構築するかという課題に向き合うことである。

1-3. 科学的知見に基づく共存への道

野生動物との共存という言葉は、しばしば「動物を保護し、自然を守る」という意味で捉えられがちである。しかし、人間活動と野生動物の生息域が重なりつつある現代において、そのまま見守るといった無干渉な共存は難しい。このまま放置すれば、特定の種が爆発的に増加して生態系のバランスを崩したり、地域社会の疲弊を招いたりする結果につながる。科学的なデータに基づいて、野生動物の生態を正しく理解し、適切な距離感を保つための管理を行うことが求められている。これには、個体数管理、被害防除、生息地管理の 3 つの視点が不可欠である。加えて、種や地域によっては追い払いなどの行動管理も重要となる。

本報告では、宮崎県に生息する主要な野生動物（ニホンザル、ニホンジカ、コウモリ類、外来哺乳類など）について、その生態的特徴、歴史的な分布変遷、最新の調査データに基づく現

目次

1. はじめに	1
1-1. 宮崎県の自然環境と生物多様性	1
1-2. 変容するヒトと動物との関係	1
1-3. 科学的知見に基づく共存への道	1
2. 宮崎県のニホンザル	2
2-1. ニホンザルはどんな動物か	2
2-2. ニホンザルの歴史と宮崎県内での分布	3
2-3. ニホンザルによる県内の被害の状況	5
2-4. 被害対策をどうすすめるか	6
3. 宮崎県のニホンジカ	7
3-1. ニホンジカはどんな動物か	7
3-2. 宮崎県内での分布	7
3-3. 全国的な捕獲制度の流れ	8
3-4. ニホンジカはなぜ増えたのか	9
3-5. ニホンジカが増えてどうなったのか	10
3-6. 抜本的な対策としての捕獲	10
4. 宮崎県のコウモリ類	12
4-1. 最も身近な哺乳類のコウモリ	12
4-2. なんとなく悪いイメージ？実際は地域の農業と生態系に重要な貢献	13
4-3. 宮崎県のコウモリ類の紹介	14
5. 宮崎県の哺乳類の外来種	15
5-1. 宮崎県における外来哺乳類の位置づけ	15
5-2. アライグマ	15
5-3. クリハラリス	16
5-4. その他の外来種	16
6. 宮崎県の獣類（陸生哺乳類）	17
6-1. 宮崎県の哺乳類概観	17
6-2. 絶滅種	18
6-3. 絶滅危惧種	19

宮崎の野生動物
—ヒトと動物の関係から考える—

宮崎野生動物研究会／岩切環境技研株式会社

岩切 康二

宮崎県文化講座研究紀要 第五十二輯

令和八年三月三十一日 発行

編集 宮崎県立図書館
刊行

〒八八〇〇〇三二

宮崎市船塚三丁目二一〇番地一

電話〇九八五―二九―二九二一

印刷 宮崎県印刷事業協同組合

〒八八〇―二二〇四

宮崎県宮崎市浮田佃前二八六五―一

電話〇九八五―四七―九一五七

(非売品)

No.

© 2026 宮崎県立図書館